榎木畑Ⅱ遺跡発掘調査概要報告書

――特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書――

2006

群馬県安中市教育委員会

榎木畑Ⅱ遺跡発掘調査概要報告書

――特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 概 要 報 告 書――

2006

群馬県安中市教育委員会

榎木畑Ⅱ遺跡全景

序

安中市は群馬県の西南部に位置し、上毛三山に囲まれた田園都市です。古くは東山道が通り、江戸時代には中山道、そして現在は国道18号線と交通の要として栄えてまいりました。

今回の発掘調査は、特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に伴うものです。明嶺荘は建設時にも発掘調査が行われ、縄文時代前期から平安時代の村の跡が確認され、発掘調査報告書『榎木畑遺跡』が刊行されています。今回の調査は榎木畑遺跡の東に隣接する部分で、前回同様縄文時代前期から平安時代の遺構・遺物が確認されました。調査の状況を見ると、それぞれの時期の村は今回の調査区よりも東に広がっていくことがわかりました。

発掘調査は、この様な貴重な文化財を後世に残すことを目的とし、記録保存の措置を講ずるものです。

こうした埋蔵文化財はかけがえのない郷土の遺産であり、市民のみなさまに郷土の歴史を学習していただけるよう広く活用を図り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めていく所存です。

終わりに、発掘調査に御協力いただいた地元の皆様や、安中市の文化財行政の一端を担い、発掘調査に従事していただいた方々には、この場を借りて感謝の意を表したいと存じます。

平成18年３月

安中市教育委員会

教育長　高　橋　重　治

例　　言

1　本書は平成17年度に社会福祉法人あんなか福祉会が実施した特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に伴う榎木畑II遺跡（C―20）の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査及び遺物整理は平成17年度の社会福祉法人あんなか福祉会（特別養護老人ホーム明嶺荘）からの埋蔵文化財発掘調査・整理委託金により実施した。

3　発掘調査は安中市教育委員会直営で実施し、文化振興課文化財係主査（文化財保護主事）千田茂雄が担当、鬼形敦子が補佐をした。

4　本書の編集・執筆等は千田、鬼形が行った。

5　遺構の写真撮影は千田が行った。航空写真は㈱フジテクノに委託して行った。

6　遺構の版組、写真図版の作成は、千田、鬼形、駒口徹也、廣上良枝、柳沢真由美が行った。

7　土器実測・トレース・属性表作成の一部を㈲前橋文化財研究所に委託して行った。

8　遺物実測用写真・遺物写真の撮影は小川忠博写真事務所・㈲前橋文化財研究所に委託して行った。

9　調査区の国家座標取付及び、測量基準杭の設置は㈱大成測量が実施した。

10　今回の調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

11　調査及び遺物整理の期間中多くの方々に有益な指導、助言、協力を行っていただいた。また発掘調査及び遺物整理に従事していただいた方に厚くお礼申し上げます。

（指導・助言　敬称略）

小川忠博　折舘伸二　長井正欣　日沖剛史　森田秀策　神戸聖語

（調査従事者　敬称略）

今井保美　岩井英雄　宇佐美璋一　鬼形敦子　小野　毅　駒口徹也　反町良一　長井三芳

野口義則　萩原静夫　廣上良枝　柳沢真由美　吉村度子

12　調査組織

教育委員会事務局

教育長	高橋重治	主査	古立美代子
教育部長	佐藤伸太郎	主査（文化時保護主事）	千田茂雄（調査担当）
文化振興課長	大野孝一	主任	深町　真
文化財係長	藤巻正勝	主事	井上慎也

凡　　例

1．榎木畑II遺跡全体図の縮尺は１／80である。

2．住居址等遺構の縮尺は１／40である。

3．遺物の縮尺は次のとおりである。

　土　器　１／２・１／４

4．土層説明中での記号、略称は次の通りである。

　色調＜：より明るい方向を示す（例１＜２：１より２の方が明るい）

　しまり、粘性　◎：あり、○：ややあり、△：あまりない、×：なし

　混入物　◎：大量、○：多量、△：少量、＊：若干、×：なし

　WP：白色粒子、YP（As-YP）：板鼻黄色軽石層、RP：ローム粒子、RB：ロームブロック

　B（As-B）：浅間B軽石、BP：板鼻褐色軽石層

5．住居址実測図の●はセクション及びエレベーションのポイントを、○は16分割のポイントを示す。

6．柱穴のスクリントーンは

　20～39

　40～

目　　次

序
例　　言
凡　　例
本文目次
挿図目次
表 目 次
図版目次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　調査の方法と経過……1
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境……3
Ⅳ　層　　序……5
Ⅴ　遺跡概要……6
Ⅵ　遺構と遺物……6
Ⅶ　おわりに……31

挿図目次

第１図　榎木畑Ⅱ遺跡と周辺遺跡の位置図…… 2
第２図　榎木畑Ⅱ遺跡調査区設定図…… 4
第３図　基本層序柱状図…… 5
第４図　Ｊ－１号住居址実測図(1)…… 8
第５図　Ｊ－１号住居址実測図(2)…… 9
第６図　Ｊ－１号住居址出土の遺物(1)……10
第７図　Ｊ－１号住居址出土の遺物(2)……11
第８図　グリッド出土の遺物(1)……14
第９図　グリッド出土の遺物(2)……15
第10図　グリッド出土の遺物(3)……16
第11図　グリッド出土の遺物(4)……17
第12図　出土遺物実測図 ……18
第13図　Ｈ－１ａ・ｂ号住居址実測図(1)……22
第14図　Ｈ－１ａ・ｂ号住居址実測図(2)……23
第15図　Ｈ－２号住居址実測図……24
第16図　Ｈ－３号住居址実測図……25
第17図　Ｈ－４号住居址実測図……26
第18図　Ｈ－５ａ・ｂ号住居址実測図……27
第19図　Ｈ－６号住居址・Ｄ－６実測図……28
第20図　Ｈ－１・２・３・６号住居址出土の遺物……29
付　図　榎木畑Ⅱ遺跡全体図

表　目　次

第１表　Ｊ－１号住居址出土遺物観察表……12
第２表　グリッド出土遺物観察表……19
第３表　土坑出土遺物観察表……21
第４表　ピット出土遺物観察表……21
第５表　表採の遺物観察表……21
第６表　Ｈ住出土遺物観察表……30

図版目次

図版１　Ｊ－１号住・Ｈ－４号住全景
　　Ｈ－２号住全景
図版２　Ｈ－１ａ・ｂ号住・Ｄ－７全景
　　Ｈ－３号住全景
図版３　Ｈ－５ａ・ｂ号住・Ｈ－６号住・
　　Ｄ－６全景
図版４　Ｊ－１号住居址出土の遺物
図版５　土坑・グリッド出土遺物
図版６　Ｈ号住居址出土の遺物

Ⅰ　調査に至る経過

平成16年、社会福祉法人あんなか福祉会（特別養護老人ホーム明嶺荘）より、特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に係る埋蔵文化財の取り扱いに関しての照会が市教育委員会にあった。該当地区は、市内遺跡詳細分布調査により周知の遺跡地として確認されている場所であり、また特別養護老人ホーム明嶺荘建設時にも発掘調査を行っていて、縄文時代前期から平安時代の遺構が確認されている(『榎木畑遺跡』1990安中市教育委員会)。

『榎木畑遺跡』の結果から見て、今回の施設整備事業該当地区内に埋蔵文化財が広がっている可能性は非常に高く、その取り扱いに関し協議を行う事とした。

計画変更を含め埋蔵文化財を保護すべく協議を行ったが、計画を変更しても遺跡地内を回避することが不可能であること、高齢化社会を迎え特別養護老人ホーム明嶺荘もデイサービスなどの需要が増え、施設の増設が急務となっていることなどから、当初の計画どおり事業を実施することとなった。

そのため市教育委員会では、事業実施により埋蔵文化財に影響を受ける部分について発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

Ⅱ　調査の方法と経過

調査はまず、発掘調査区全域をカバーするようにグリッドの設定を行った。グリッドは、１グリッドが４ｍ×４ｍで北西隅を基点とし、北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…西から東へ１，２，３…と呼称するようにした。また、グリッドをさらに四分した２ｍ×２ｍの細グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にアルファベットの小文字でａ、ｂ、ｃ、ｄと呼称することにした。そして、座標値は国家座標に取り付けた。国家座標値は、Ｃ－６グリッドがＸ＝35528.33、Ｙ＝－87964.70、Ｏ－５グリッドがＸ＝35480.29、Ｙ＝－87961.23、Ｑ－２グリッドがＸ＝35470.53、Ｙ＝－87971.85である。

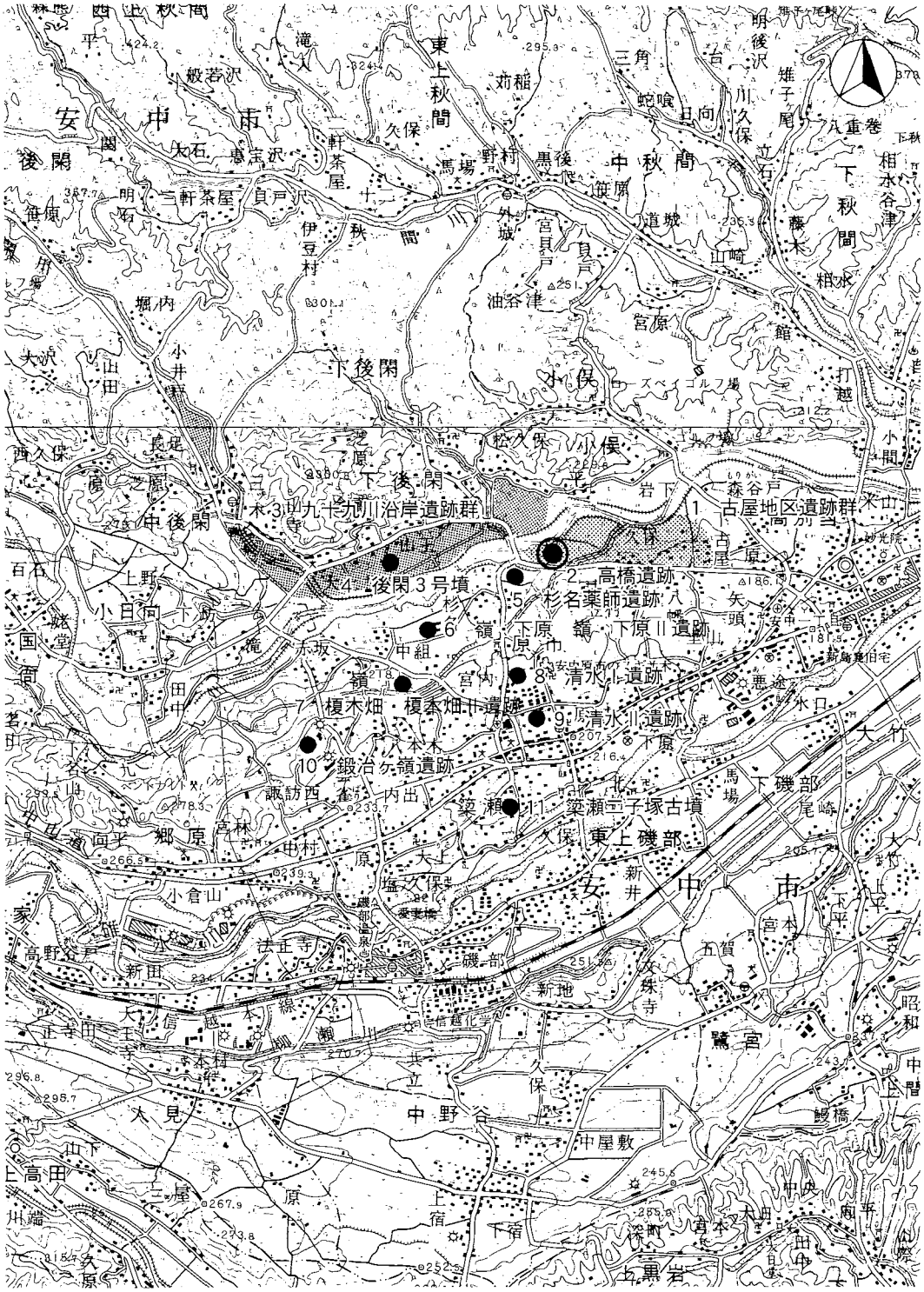
調査はバックホーによりⅣ層上面まで掘削し、その後人力により遺構、遺物の確認作業を実施した。確認された遺構は順次精査を行い、調査区全体の航空写真撮影を業者に委託して実施した。遺構及び全体の平面図は航空写真を利用した方法で行った。土層断面図は、それぞれ必要に応じ縮尺１／40を基本として従来の方法で作成した。

遺物の取り上げは基本的に各遺構ごとに行った。住居址についてはセクションのラインを基準に16に分割し、各層位ごとに分層して取り上げる16分割分層方式にて行った。しかし今回は調査区の幅が狭い部分もあり、住居址の１部が調査区外に出てしまうものが多いため、その遺構状態に沿うように設定、あるいはグリッドにて取り上げた。遺構以外の部分については、従来どおりグリッドを四分した２ｍ×２ｍの細グリッドで層位毎に取り上げた。また、必要に応じて、遺構・遺物の写真撮影を行った。

遺物整理は、発掘調査の終了後から断続的に実施した。

作業は、遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレース・写真撮影の順で行い、並行して遺構図面の整理・素図作成、トレース、写真整理を行った。遺物の実測・トレース・属性分析等の一部は、整理作業の省力化を行うため小川忠博写真事務所、有限会社前橋文化財研究所に業務委託した。

今回は限られた整理期間と経費のなか、概要報告として客観的に時期や特徴を示す遺物を優先し掲載した。また、縄文時代の石器については整理・分析が間に合わず概要報告に掲載することが出来なかったため、本報告時に譲ることとした。



第１図　榎木畑II遺跡と周辺遺跡の位置図

III　遺跡の地理的・歴史的環境

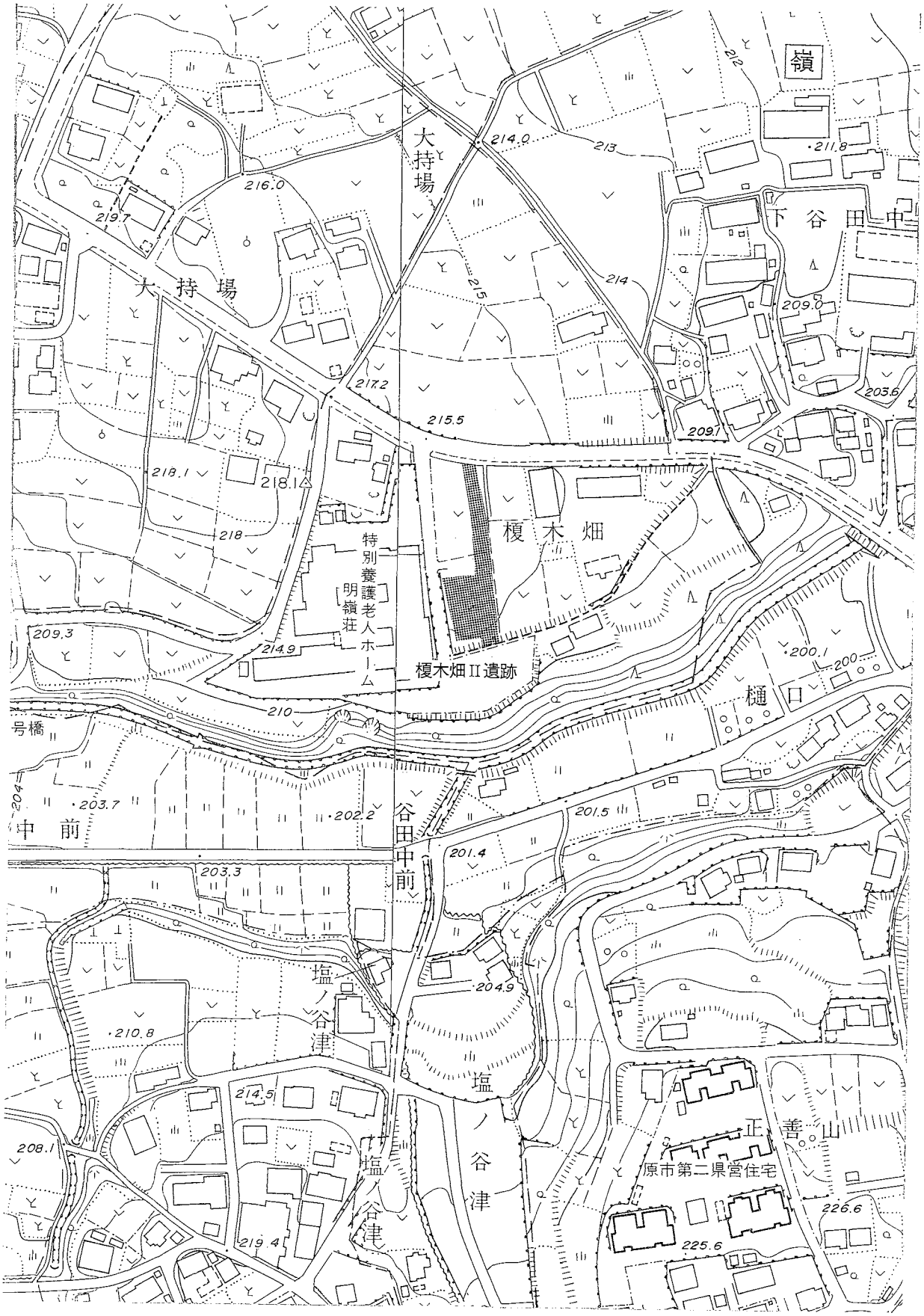
安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側にはこれと並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には河岸段丘が発達し、下位段丘（磯部地区）、中位段丘（原市・安中地区）、上位段丘（東横野地区）が存在する。また、市の北部や南東部等には丘陵（秋間丘陵・岩野谷丘陵・松井田丘陵）が分布する。

榎木畑II遺跡は群馬県安中市嶺字榎木畑地内に存在し、九十九川と八咫川に挟まれた河岸段丘上に位置する。

周辺の遺跡を概観すると、本遺跡に隣接して榎木畑遺跡(7)。また同じ九十九川の河岸段丘上に、弥生時代・古墳時代の集落遺跡である杉名薬師遺跡(5)。奈良・平安時代の工房あるいは官衙的な性格が推測される嶺・下原、嶺・下原II遺跡(6)。縄文時代前期前半、奈良時代の住居址を確認した清水遺跡Ⅰ区(8)。縄文時代前期、中期、平安時代の住居址及び奈良時代の官的な資格を持つと考えられる掘立柱建物址を確認した鍛冶ヶ嶺遺跡(10)。奈良時代の集落と、東日本に於いて初めて検出された中世（15世紀末から16世紀初頭）の瓦質陶器生産窯の清水遺跡II区(9) 等がある。

この他、杉名薬師遺跡(5)の北東の九十九川低地には、杉名薬師遺跡との関係が推測される弥生時代・古墳時代の集落遺跡である高橋遺跡(2)。またその周辺の九十九川低地には、As-B 軽石直下の水田址を確認した九十九川沿岸遺跡群(3)が存在する。九十九川沿岸遺跡群中には 6 世紀初めに造られたと考えられる後閑 3 号墳(4) が存在し、関東地方では最も古い横穴式石室を有する古墳の一つとして知られる梁瀬二子塚古墳(11)と、密接な関係があったと考えられている。

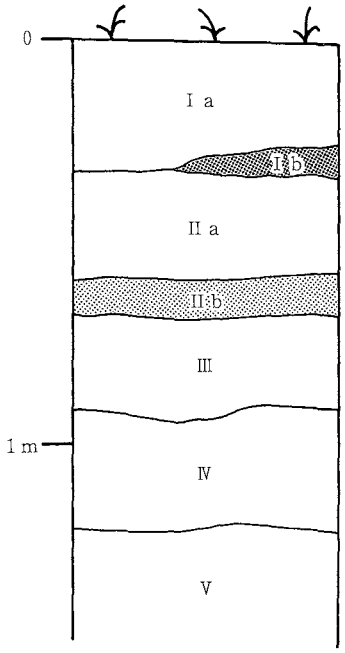
この様に、九十九川を中心として、嶺地区は工房や官的な性格を持つ遺跡が数多く存在し、東山道との関係も含め古代を考える上で貴重な地区と言うことができる。



第２図　榎木畑Ⅱ遺跡調査区設定図（１：2,500）

Ⅳ 層　　序

榎木畑Ⅱ遺跡の基本層序は第　図のとおりである。指標テフラは浅間Ａ軽石（As-A：1783年降下）、浅間Ｂ軽石（As-B：1108年降下）が確認される。浅間Ａ軽石は耕作によりほとんど除去されており、浅間Ｂ軽石は途切れ途切れになりながらも全域に確認された。



第３図　基本層序柱状図

Ⅰａ層	黒褐色土層	浅間Ａ軽石を多量に混入する。現在の耕作土で、しまり、粘性共にあまりない
Ⅰｂ層	灰白色軽石層	浅間Ａ軽石純層。部分的に確認できる。
Ⅱａ層	黒色土層	粘性はややあるが、しまりはあまりない。As-Ｂ軽石を多量に混入する。
Ⅱｂ層	灰褐色軽石層	浅間Ｂ軽石純層。全域で５～15cm前後堆積している。
Ⅲ層	黒色土層	As-Ｂ軽石はまったく混入しない。奈良・平安時代の遺構の覆土の主体を成す層である。粘性はややあるが、しまりはあまりない。
Ⅳ層	暗褐色土層	Ⅲ層より明るく、しまり、粘性共にある。この層の上面で遺構が確認される。
Ⅴ層	黄褐色粘質土層	この層からローム層となる。粘性、しまり共にある。

V　遺跡概要

榎木畑II遺跡からは、縄文時代中期の住居跡１軒、８世紀前半の住居跡２軒、９世紀前半の住居跡１軒、９世紀後半から10世紀前半にかけての住居跡１軒、時期不明の住居跡２軒が検出された。

住居跡が検出された部分は、道路建設部分のため幅が狭く、検出された全ての住居跡はその１部が調査区外となってしまい、１軒全てを調査できるものはなかった。また、調査区南のＮ－１グリッドからＱ－１グリッドにかけての正方形の張り出し部分からは、遺構の検出は出来なかったが、縄文時代前期から中期にかけての遺物が大量に検出された。

VI　遺構と遺物

縄文時代（第４図～第７図）

縄文時代の住居跡は１軒検出された。円形の平面形態を持つ住居跡の1/3ほどが確認され、現状においての長軸は5.88m、短軸は2.52m、長軸方向はＮ－12°－W、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で76cmを計る。炉は調査区外に出てしまっていて確認できなかった。

遺物は、諸磯ｂ式期を主体に検出された。調査当初、遺構確認が明確に出来ない状態で遺物が出土し始めたため、その取り上げについては16分割法ではなく、細グリッドによって行った。

８世紀前半（第13図・第14図・第19図・第20図）

Ｈ－１ａ・１ｂ号住居跡：両住居跡とも西側約1/3程の確認で、住居跡毎の切り合い部分が調査区外になってしまうため、新旧関係は明確に捉えることは出来なかった。Ｈ－１ａ号住は現状での長軸は3.08m、短軸2.12m、長軸方向はＮ－８°－W、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で68cmを計る。柱穴は西壁に沿って３本確認された。また確認された床面全体に、床下土坑状の浅い堀込みが幾つも重なって確認された。Ｈ－１ｂ号住は現状での長軸は4.60m、短軸1.52m、長軸方向はＮ－13°－W、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で76cmを計る。

遺物はＨ－１ａ・１ｂ号住居跡含めて16分割方で取り上げた。遺物の出土量は少なく、遺存状態も良くなかった。

Ｈ－６号住居跡：遺構西端部分のみの確認のためはっきりとせず、大きな土坑の可能性もあるが今回は住居跡として取り扱うこととした。現状での長軸は3.52m、短軸0.76m、長軸方向はＮ－７°－W、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で88cmを計る。

遺物の出土は少量で、磨滅している個体も多く遺存状態は良くなかった。

９世紀前半（第15図・第20図）

Ｈ－２号住居跡：遺構南端部分のみの確認で、堀込みも浅く遺構平面プランの確認も困難であった。現状での長軸は4.16m、短軸は1.04m、長軸方向はＮ－106°－W、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で24cmを計る。

遺物の出土も極端に少なく、遺存状態も悪い。掲載できる遺物は１点のみであった。

９世紀後半から10世紀前半（第16図・第20図）

Ｈ－３号住居跡：遺構確認面からの堀込みは浅く、西壁の１部は確認できない状態であったが、遺構の西側約2/3程が確認できた。現状での長軸は3.28m、短軸は2.88m、長軸方向はＮ－71°－Ｅ、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で12cmを計る。柱穴も４本確認されたが規則性は持たず、住居跡の外側にも同規模のピットが存在するため、住居跡に伴わない可能性もある。

遺物は遺構の遺存状態から比べると多く出土した。ほとんどが床直からの出土で、遺存状態も良好であった。

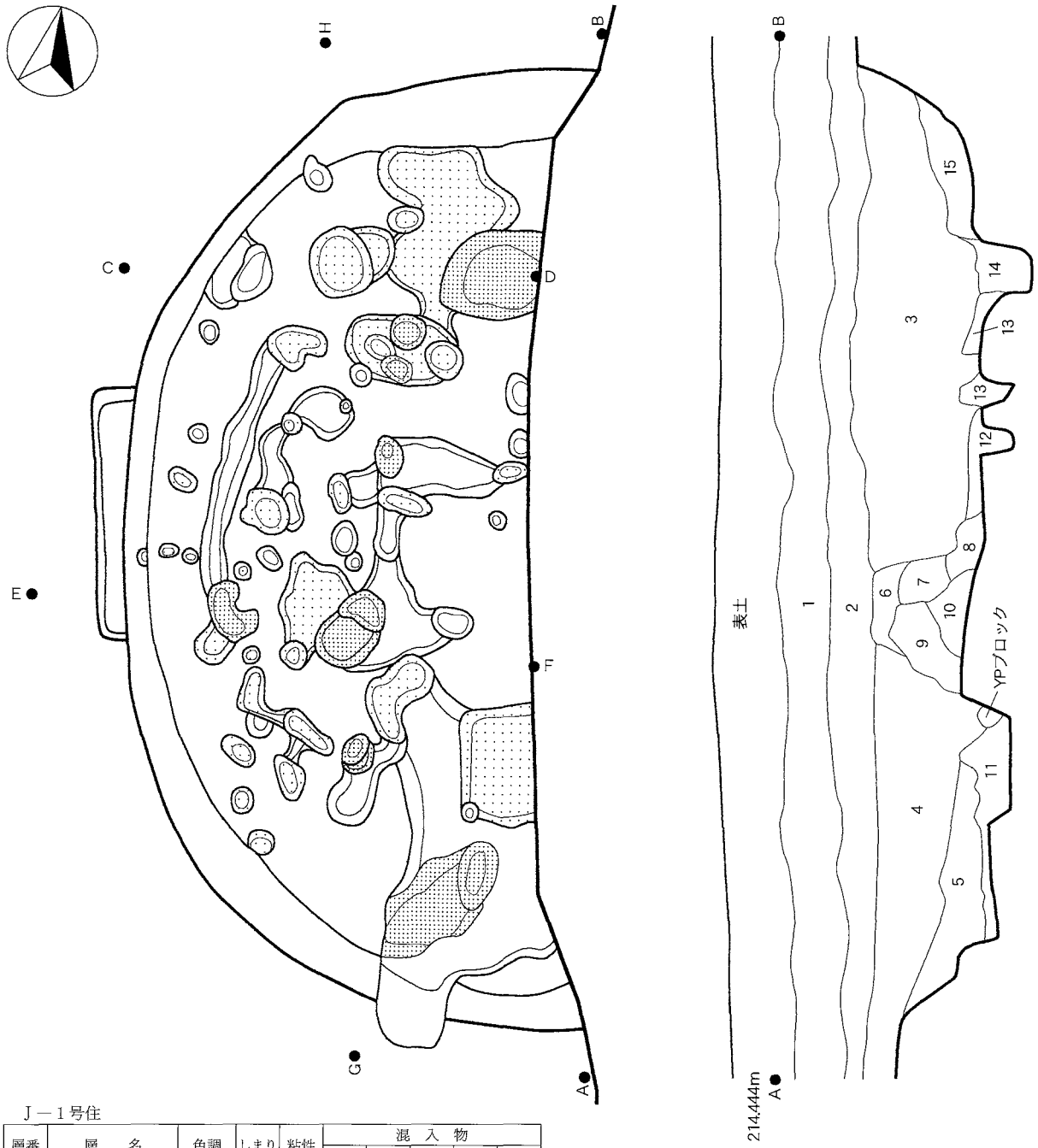
時期不明（第17図・第18図）

Ｈ－４号住居跡：遺構の西側約1/3程を確認した。遺存状態は良好で、現状での長軸は3.8m、短軸は2.04m、長軸方向はＮ－８°－W、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で44cmを計る。北壁・西壁下に周溝が周り、住居跡北と南の角部分に土坑が確認された。

遺物はグリッドも含め１点も確認され無かった。

Ｈ－５ａ・ｂ号住居跡：遺構西端部分のみの確認で、２軒の住居跡が重複しているものと考えられる。Ｈ－５ａ号住居がＨ－５ｂ号住居を切っており、Ｈ－５ａ号住居址は現状での長軸は2.32m、短軸は0.72m、長軸方向はＮ－16°－W、確認面からの堀込みはもっとも深い部分で44cmを計る。

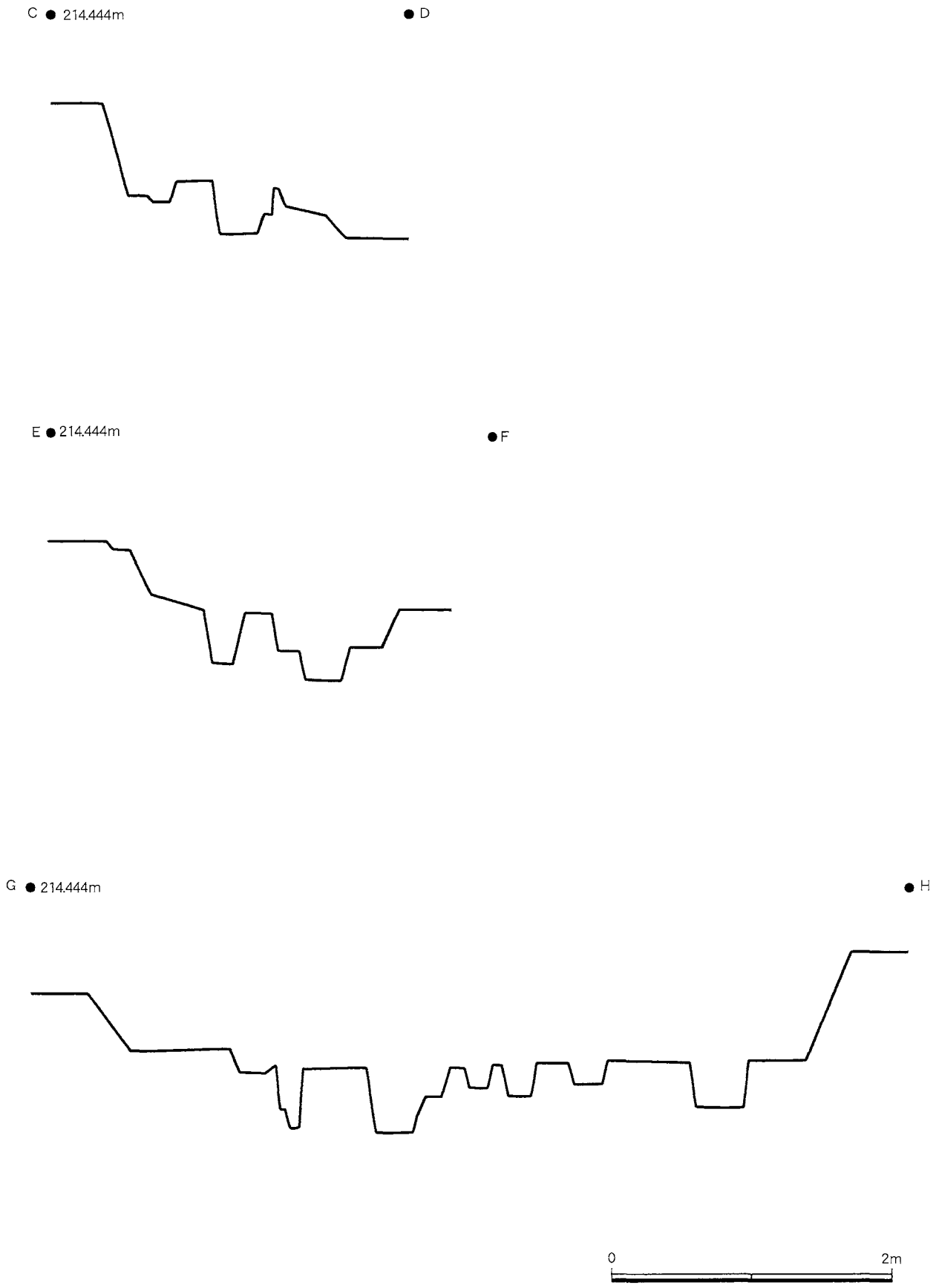
遺物は１点も確認されなかった。



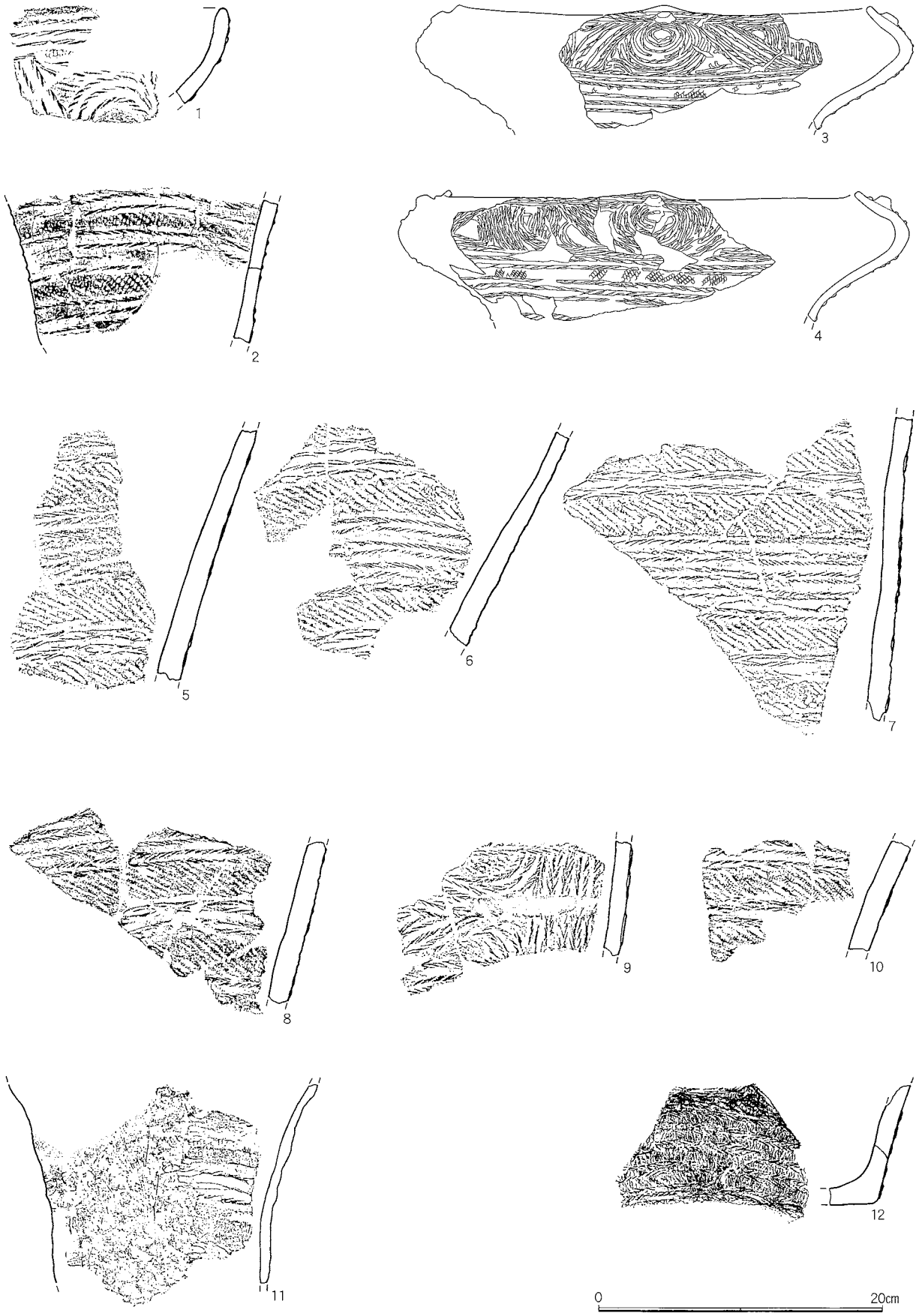
J－1号住

層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物				
					WP	RP	RB	YP	ｽﾘｯｺ
1	黒褐色土層		△	△	※				
2	灰褐色土層		○	△	△	※		※	※
3	黒黄褐色土層		◎	△	○	○	△	○	△
4	にぶい褐色土層		◎	△	○	○	△	○	△
5	にぶい褐色土層		◎	○	○	※	※	※	※
6	にぶい褐色土層	4 ＜6	◎	○	△	○	△	△	※
7	にぶい褐色土層	6 ＜7	◎	○	△	○	○	△	※
8	にぶい褐色土層		○	○	△	◎	○	△	※
9	橙色土層		◎	○	※	○	○	○	
10	黄褐色土層		◎	◎		◎	◎	○	△
11	橙色土層	9 ＜11	◎	○	※	○	○	◎	
12	黒色土層		○	△	※	※	※	※	※
13	黒褐色土層		△	△		※	※	◎	
14	褐灰色土層		△	△		※	※	○	
15	暗褐色土層		○	△	△	△	△	△	※

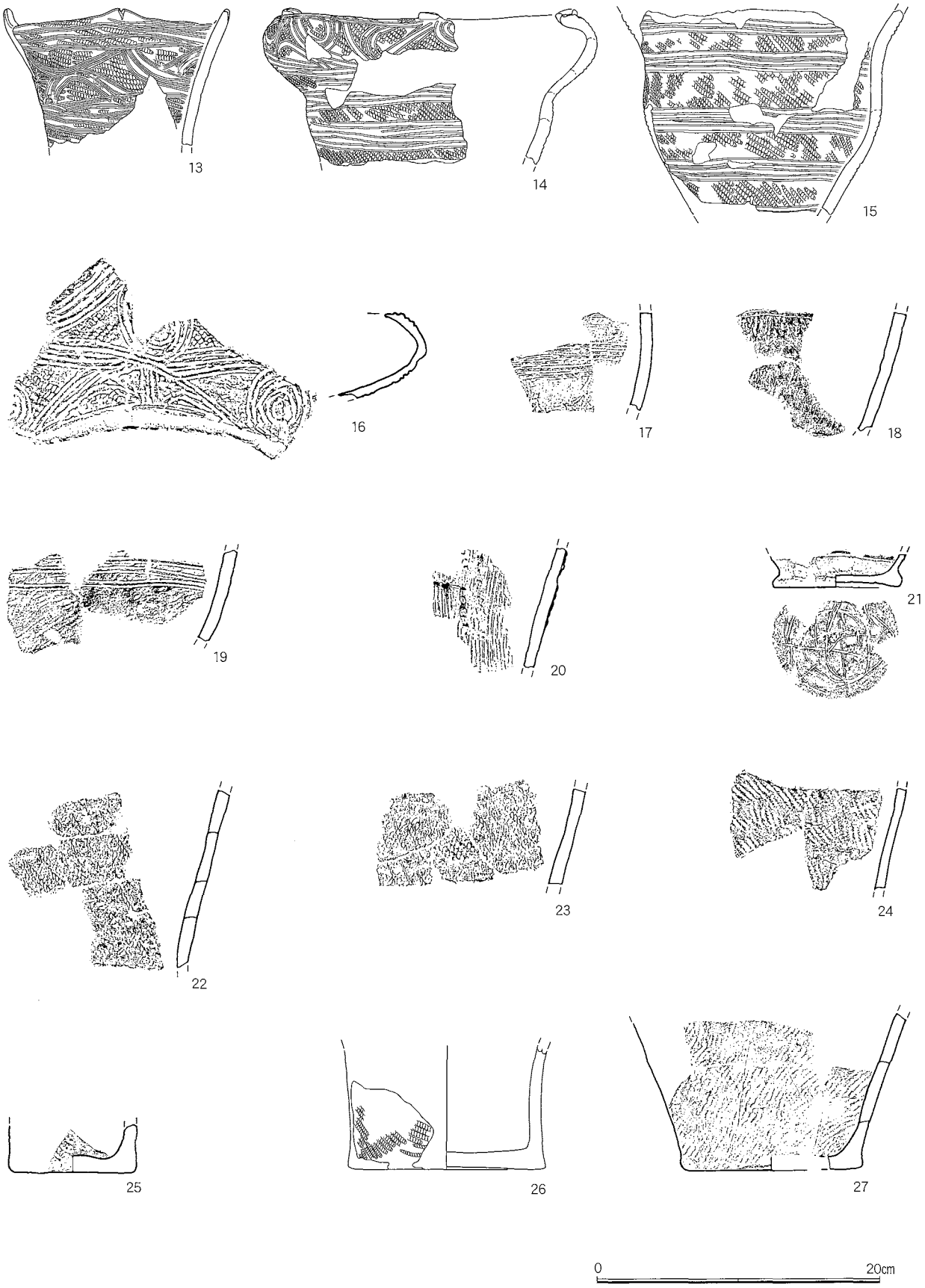
第4図　J－1号住居址実測図(1)



第５図　Ｊ－１号住居址実測図(2)



第６図　Ｊ－１号住居址出土の遺物(1)



第７図　Ｊ－１号住居址出土の遺物(2)

第１表　Ｊ－１号住居址出土遺物観察表

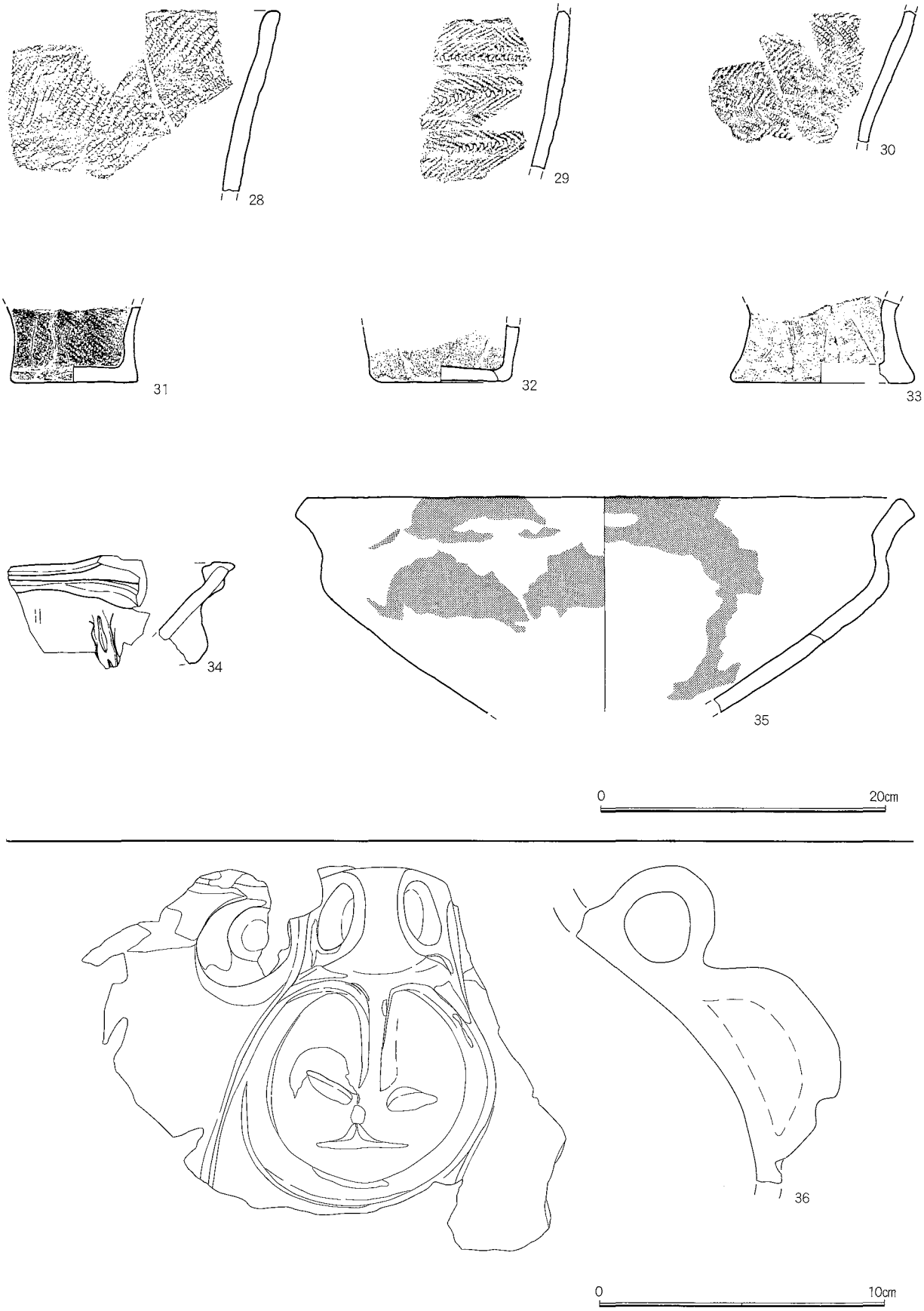
№.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	N－５d	口　— 底　— 高　(6.7)	わずかに内湾する。地文に単節 RL の横位施文を持ち、刻みの加えられた浮線で入組文・渦巻文を描くと推定される。	色　にぶい黄橙色 焼　良	口縁部の破片	諸磯ｂ式
2	O－５b	口　— 底　— 高　(10.0)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　橙色 焼　良	胴部の3/8	諸磯ｂ式
3	O－５a	口　29.0 底　— 高　(8.7)	口縁部は内湾して膨らみ、４単位の小波状口縁を呈す。波頂部下には瘤状突起を貼付する。口縁部文様帯は、刻みの加えられた浮線で入組文・渦巻文を描く。胴部は、刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。地文に単節 RL の横位施文を持つ。	色　暗灰黄色～明褐色 焼　普通	口縁部～胴上部の1/5 №.４と同一個体か？	諸磯ｂ式
4	O－５a	口　29.8 底　— 高　(9.2)	口縁部は内湾して膨らみ、４単位の小波状口縁を呈す。波頂部下には瘤状突起を貼付する。口縁部文様帯は、刻みの加えられた浮線で入組文・渦巻文を描く。胴部は、刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。地文に単節 RL の横位施文を持つ。	色　にぶい赤褐色 焼　普通	口縁部～胴上部の1/5 №.３と同一個体か？	諸磯ｂ式
5	O－５a O－５b	口　— 底　— 高　(17.5)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　橙色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
6	O－５b	口　— 底　— 高　(15.3)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　明赤褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
7	O－５a O－５b	口　— 底　— 高　(21.5)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
8	O－５b O－５a周辺	口　— 底　— 高　(11.4)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　明赤褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
9	O－５a	口　— 底　— 高　(8.1)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線で入組文を描く。	色　にぶい橙色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
10	O－５a O－５b	口　— 底　— 高　(7.8)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　明赤褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
11	O－５a O－５b	口　— 底　— 高　(14.0)	刻みの加えられない浮線間を連結する浮線が縦位に施される。刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　灰褐色 焼　良	胴部の1/4 表面剝落著しい	諸磯ｂ式
12	N－３a O－５b	口　— 底　— 高　(8.4)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　橙色 焼　良	胴下部～底部の破片	諸磯ｂ式
13	N－５c N－５c周辺	口　15.0 底　— 高　(9.8)	４単位の小波状口縁を呈す。波頂部に刻みを施す。地文に単節 RL の横位施文を持ち、半截竹管による平行沈線を口縁直下と胴中央部に巡らし、横位区画する。区画内には対弧文を描く。	色　にぶい黄褐色 焼　普通	口縁部～胴中央部の1/2	諸磯ｂ式
14	O－５b	口　20.4 底　— 高　(11.1)	口縁部は内湾して膨らみ、胴上部で括れる器形。口唇部に４単位の渦巻状小突起を有す。地文に単節 RL の横位施文を持つ。口縁部文様帯には半截竹管による平行沈線で入組文を描く。胴部には平行沈線を数段巡らす。	色　にぶい黄橙色 焼　普通	口縁部～胴中央部の1/3	諸磯ｂ式
15	O－５b N－５d	口　— 底　— 高　(14.5)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、半截竹管による平行沈線を数段横位に巡らす。	色　にぶい黄褐色 焼　普通	胴部の1/2	諸磯ｂ式
16	O－５a N－５c周辺	口　— 底　— 高　(6.0)	口縁部は内湾して膨らみ、波状口縁を呈す。地文に単節 RL の縦位・横位施文を持つ。半截竹管による平行沈線で入組文と、波頂部下・波底部下と推定される部分に同心円文を描く。	色　灰黄褐色 焼　良	口縁部の破片	諸磯ｂ式
17	O－５a	口　— 底　— 高　(7.0)	地文に縄文施文されるが、縄文原体不明。半截竹管による平行沈線を巡らす。	色　にぶい褐色 焼　良	胴部の破片 №.18と同一個体	諸磯ｂ式
18	O－５a	口　— 底　— 高　(8.5)	地文に縄文施文されるが、縄文原体不明。半截竹管による平行沈線を巡らす。縄文施文部に細い沈線で施文された曲線文有り。	色　にぶい褐色 焼　良	胴部の破片 №.17と同一個体	諸磯ｂ式
19	N－５d	口　— 底　— 高　(6.6)	地文に無節 Lr の横位施文を持ち、半截竹管による平行沈線を巡らす。	色　明褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
20	N－５c周辺 N－３d	口　— 底　— 高　(8.6)	対のボタン状貼付文と、半截竹管により刺突を加えられた棒状貼付文を付す。地文には半截竹管により集合化された平行沈線を縦位に施す。	色　にぶい黄橙色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｃ式
21	O－５a	口　— 底　9.0 高　(2.3)	胴下部に半截竹管による平行沈線を横位に巡らし、外面底部に単沈線で曲線文を描く。	色　にぶい黄橙色 焼　良	胴下部～底部	諸磯ｃ式
22	O－５b	口　— 底　— 高　(12.7)	附加条縄文が施文される。	色　明赤褐色 焼　良	胴部の破片 №.23と同一個体	前期後半
23	O－５b	口　— 底　— 高　(6.8)	附加条縄文が施文される。	色　明赤褐色 焼　良	胴部の破片 №.22と同一個体	前期後半

No	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
24	O－5 a	口　　－ 底　　－ 高　(7.2)	単節 RL を横位施文する。	色　にぶい褐色 焼　良	胴部の破片	前期後半
25	O－5 b	口　　－ 底　　9.0 高　(3.5)	単節 RL を横位施文する。	色　橙色 焼　良	胴下部の一部～底部の5/6	前期後半
26	O－5 b	口　　－ 底　14.0 高　(8.8)	単節 RL を横位施文する。	色　灰黄色 焼　普通	胴下部～底部の1/2	諸磯 b 式
27	N－5 d N－5 c	口　　－ 底　12.8 高　(11.0)	無節 Lr を横位施文する。	色　明褐色 焼　良	胴下部の1/5～底部の一部	前期後半

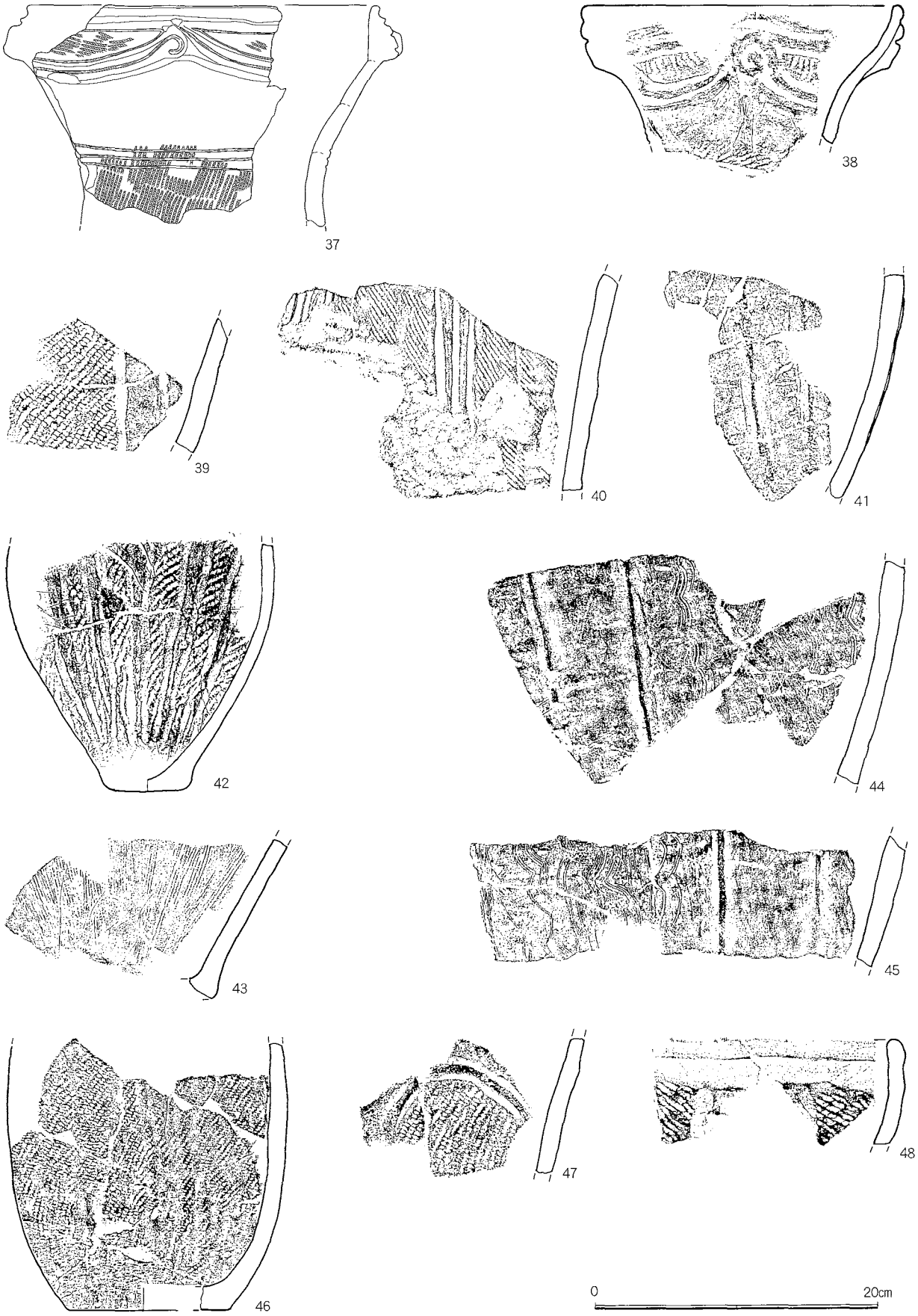
出土位置は重量の重い順に記載

第８図　グリッド出土の遺物(1)

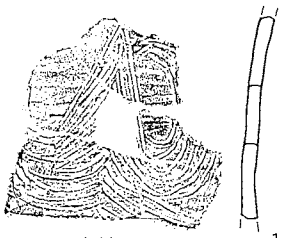
第９図　グリッド出土の遺物(2)



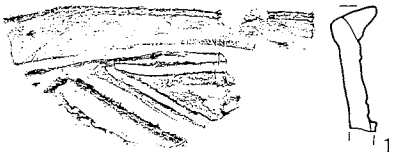
第10図　グリッド出土の遺物(3)

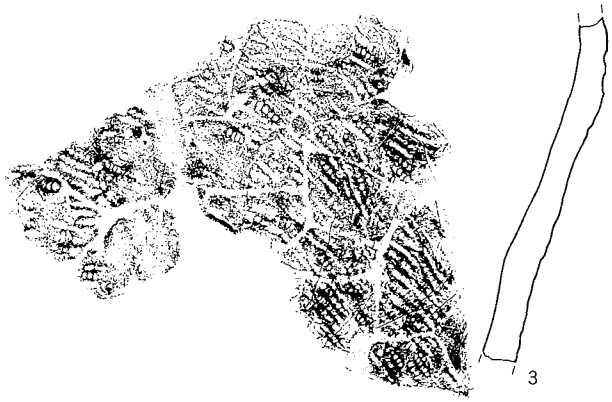


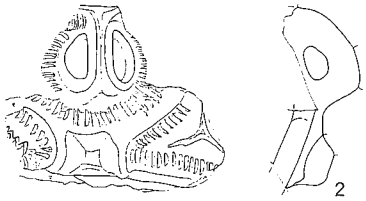
第11図　グリッド出土の遺物(4)

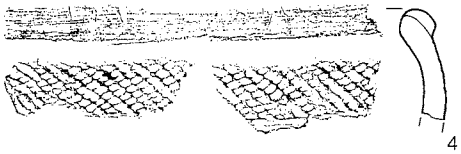


土坑－6



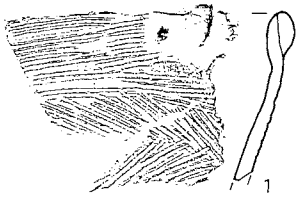






土坑－7

ピット－1



表採

0　20cm

第12図　出土遺物実測図

第２表　グリッド出土遺物観察表

No.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	Q－４ａ	口　　－ 底　　－ 高　(18.0)	二単位と推定されるわずかな突起を持つ大波状口縁を呈す。幅広の半截竹管による平行沈線と爪形文を口縁部に４～５段、胴中央部に数段巡らし区画する。区画内には平行沈線と爪形文で弧線文・懸架状入組文が描かれる。	色　明赤褐色 焼　良	口縁部の破片 No.２・５と同一個体	諸磯ｂ式
2	Q－４ａ	口　　－ 底　　－ 高　(16.7)	幅広の半截竹管による平行沈線と爪形文を口縁部に４～５段、胴中央部に数段巡らし区画する。区画内には平行沈線と爪形文で弧線文・懸架状入組文が描かれる。	色　明赤褐色 焼　良	胴部の破片 No.１・５と同一個体	諸磯ｂ式
3	Q－４ａ	口　　－ 底　　－ 高　(6.1)	幅広の半截竹管による平行沈線と爪形文を横位に巡らす。爪形文に挟まれた部分が浮線化し、斜位の刻みが加えられる。	色　にぶい黄褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
4	Q－５ｃ周辺	口　　－ 底　　－ 高　(10.2)	幅広の半截竹管による平行沈線と爪形文を横位に巡らす。爪形文に挟まれた部分が浮線化し、斜位の刻みが加えられる。単節 LR を横位施文する。	色　暗赤褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｂ式
5	Q－４ａ	口　　－ 底　　－ 高　(23.6)	二単位と推定されるわずかな突起を持つ大波状口縁を呈し、波頂部に穿孔を有す。幅広の半截竹管による平行沈線と爪形文を口縁部に４～５段、胴中央部に数段巡らし区画する。区画内には平行沈線と爪形文で弧線文・懸架状入組文が描かれる。	色　赤褐色 焼　良	口縁部～胴中央部の1/3 No.１・２と同一個体	諸磯ｂ式
6	O－４ａ O－３ｂ	口　　－ 底　　－ 高　(4.4)	内湾して膨らむ波状口縁を呈す。口唇部にわずかな突起と浮線を縦位･弧状に貼付する。地文に単節 RL の横位施文を持ち、刻みの加えられた浮線で渦巻文を描く。	色　にぶい黄褐色 焼　良	口縁部の破片	諸磯ｂ式
7	Q－５ｄ	口　　－ 底　　－ 高　(8.6)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　にぶい黄橙色 焼　普通	胴中央部の1/2	諸磯ｂ式
8	O－４ｃ P－４ａ	口　　－ 底　10.6 高　(2.9)	地文に単節 RL の横位施文を持ち、矢羽根状に刻みの加えられた浮線を横位に巡らす。	色　赤褐色 焼　良	胴下部の1/2～底部の1/4	諸磯ｂ式
9	O－４ａ	口　　－ 底　　－ 高　(18.1)	口縁部文様帯は刺突して掘りおこし、半截竹管による集合化された平行沈線を巡らす。胴部文様帯は集合化された平行沈線で縦位区画し、「Ｘ」字状の文様を描く。	色　灰黄褐色 焼　良	口縁部～胴部の破片	諸磯ｃ式
10	N－２ｄ	口　　－ 底　　－ 高　(7.3)	棒状工具を押圧することにより口唇部を波状にする。半截竹管により刺突を加えられたボタン状貼付文を付す。地文は半截竹管による平行沈線を横位に近い斜位に施す。	色　にぶい褐色 焼　良	口縁部の破片	諸磯ｃ式
11	N－３ｄ	口　　－ 底　　－ 高　(5.5)	半截竹管により刺突を加えられた対のボタン状貼付文を有し、間に棒状貼付文と剝落しているが耳朶状貼付文を交互に付すと推定される。地文には、半截竹管による平行沈線を斜位・横位に施す。	色　赤褐色 焼　良	口縁部の破片	諸磯ｃ式
12	O－４ｃ N－４ａ	口　　－ 底　　－ 高　(6.1)	半截竹管により刺突を加えられたボタン状貼付文と耳朶状貼付文が、棒状貼付文を境に対極に付される。地文には半截竹管による集合化された平行沈線を横位の矢羽根状に施す。	色　にぶい黄橙色 焼　良	口縁部の破片	諸磯ｃ式
13	表採 O－３ａ	口　　－ 底　　－ 高　(9.4)	半截竹管による集合化された平行沈線を縦位の矢羽根状・横位の矢羽根状に施す。	色　黒褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｃ式
14	O－３ａ 表採	口　　－ 底　　－ 高　(10.0)	半截竹管による集合化された平行沈線を横位の矢羽根状に施す。	色　灰黄褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｃ式
15	N－２ｃ	口　　－ 底　　－ 高　(12.8)	単節 LR を縦位・横位施文することにより羽状縄文を構成し、対の棒状貼付文を付す。	色　にぶい黄褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯ｃ式
16	O－３ｄ	口　　－ 底　8.2 高　(5.5)	半截竹管による集合化された平行沈線を巡らす。地文には縄文施文されるが、狭い間隔で平行沈線を横位施文するため、縄文が磨り消えている。	色　橙色 焼　良	胴下部の5/6～底部の7/8	諸磯ｃ式
17	N－３ｂ	口　　－ 底　13.2 高　(4.9)	半截竹管による集合化された平行沈線を縦位の矢羽根状に施す。	色　にぶい黄橙色 焼　普通	胴下部～底部の1/2	諸磯ｃ式
18	N－３ｂ N－４ａ	口　　－ 底　　－ 高　(22.7)	大波状口縁を呈す。口縁に沿って半截竹管による集合化された平行沈線を巡らす。波頂部下には、集合化された平行沈線を鋸歯状に施文することで、三角形の空白部を作りだす。集合化された平行沈線を対弧状に施文し横位のレンズ状空白部を有す。	色　にぶい黄褐色 焼　良	口縁部～胴中央部	
19	O－３ｃ	口　　－ 底　　－ 高　(8.5)	半截竹管による集合化された平行沈線を弧状に施す。	色　黄褐色 焼　良	胴部の破片	
20	O－３ｂ	口　　－ 底　　－ 高　(6.7)	結節沈線により渦巻文を描く。	色　灰褐色 焼　良	胴部の破片	
21	O－３ａ	口　13.6 底　　－ 高　(10.5)	口縁に添って粘土紐を鋸歯状に２段巡らす。胴部には短い粘土紐を鋸歯状に数段横位に貼付する。地文には、単節 RL と単節 LR の横位施文による羽状縄文を持つ。	色　にぶい褐色 焼　良	口縁部の一部～胴中央部の1/3	大木式系

No.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
22	表採 O－4 a	口　— 底　— 高　(8.1)	波状口縁を呈す。地文に半截竹管による集合化された平行沈線を横位・横位の矢羽根状に施す。粘土紐を鋸歯状に数段横位に貼付する。	色　にぶい黄橙色 焼　良	口縁部の破片	大木式系
23	O－2 a	口　— 底　— 高　(7.6)	口縁に沿って粘土紐を鋸歯状に2段巡らし、ボタン状貼付文を付す。地文には縄文施文するが、縄文原体不明。	色　褐色 焼　良	口縁部の破片 胎土中に雲母を多量に含む No.24と同一個体か？	大木式系
24	O－2 a	口　— 底　— 高　(15.1)	粘土紐を鋸歯状に横位に貼付する。地文には縄文施文するが、縄文原体不明。	色　暗褐色 焼　良	胴部の破片 胎土中に雲母を多量に含む No.23と同一個体か？	大木式系
25	O－3 b O－4 a	口　— 底　— 高　(14.6)	半截竹管による集合化された平行沈線を数段巡らすことにより、横位区画を多段化する。区画内には、集合化された平行沈線を鋸歯状・蕨手状に施文し、三角形・渦巻状の印刻を施す。	色　暗褐色 焼　良	胴部の破片	
26	O－3 b O－3 d	口　— 底　— 高　(9.1)	波状口縁を呈す。半截竹管による集合化された平行沈線を口縁に沿って巡らす。集合化された平行沈線を横位に巡らすことにより横位区画を多段化すると推定される。区画内には、集合化された平行沈線を鋸歯状・渦巻状に施文し、三角形・渦巻状の印刻を施す。	色　にぶい黄褐色 焼　良	口縁部の破片	
27	O－3 d O－3 b O－3 c	口　— 底　— 高　(8.1)	半截竹管による集合化された平行沈線を数段巡らすことにより、横位区画を多段化する。区画内には、集合化された平行沈線を弧状・鋸歯状・対弧状に施すことにより無文化した部分に三角形・レンズ状の印刻を施す。	色　赤褐色 焼　良	胴部の破片	
28	Q－5 c周辺	口　— 底　— 高　(12.7)	単節 LR を横位施文する。	色　にぶい赤褐色 焼　良	口辺部の破片	前期後半
29	O－3 b O－4 a	口　— 底　— 高　(11.1)	単節 RL と単節 LR を結束させて羽状縄文を構成する。	色　明黄褐色 焼　良	胴部の破片	前期後半
30	O－4 c	口　— 底　— 高　(9.3)	単節 RL と単節 LR の横位施文により羽状縄文を構成する。	色　にぶい黄褐色 焼　良	胴下部の破片	前期後半
31	O－3 b	口　— 底　9.0 高　(5.3)	単節 RL を横位施文すると推定される。	色　浅黄色～橙色 焼　良	胴下部～底部の2/3 外面磨滅著しい	前期後半
32	O－3 b	口　— 底　8.8 高　(4.1)	無文。	色　明黄褐色 焼　良	胴下部～底部	前期後半
33	O－3 d O－3 b	口　— 底　12.4 高　(5.9)	無文。	色　にぶい黄褐色 焼　良	胴下部の1/3～底部の一部	前期後半
34	D－5 c	口　— 底　— 高　(8.1)	波状口縁を呈す。口唇部内面を肥厚させる。口縁に沿って断面三角形の隆帯を巡らし、波頂部下で隆帯を太くする。胴上部に把手が貼付される。	色　暗褐色 焼　良	口縁部の破片	勝坂式
35	O－4 c	口　41.8 底　— 高　(15.1)	口辺部で括れ、底部に向かって急激に窄まる器形。浅鉢。無文。内外面に赤色塗彩あり。	色　褐色 焼　良	口縁部～胴下部	勝坂式
36	Q－4 c	口　— 底　— 高　(13.3)	括れ部に隆帯と把手を貼付する。把手脇に隆帯を円状に施す。把手より隆帯を垂下させ、把手下に貼付した人面状装飾を囲む。把手及び人面状装飾には部分的に赤色塗彩される。	色　黒褐色 焼　普通	胴部の破片	勝坂3式
37	E－5 b E－5 d	口　24.5 底　— 高　(15.6)	平縁。口縁部が直立するキャリパー形を呈す器形。口縁部文様帯は、断面三角形の隆帯と沈線で渦巻文を施し、弧状の区画文を配す。区画文内には単節 RL を縦位・横位施文後、鋭い沈線を隆帯に沿わせる。口縁部文様帯と胴部文様帯間に無文帯を持つ。胴部文様帯は、単節 RL を縦位施文後、三条の鋭い沈線を巡らす。	色　褐色 焼　普通	口縁部～胴上部の1/5	加曽利E 2式
38	F－5 b	口　23.0 底　— 高　(9.8)	平縁。キャリパー形を呈す器形。口縁部文様帯は、隆帯と沈線で渦巻文を施し、弧状の区画文を配す。区画文内には0段多条 RL を縦位・横位施文後、鋭い沈線を隆帯に沿わせる。口縁部文様帯と胴部文様帯間に無文帯を持つ。胴部文様帯は、単節 RL を縦位施文後、沈線を巡らす。	色　赤褐色 焼　良	口縁部の1/8～胴上部の1/6	加曽利E 2式
39	B－6 a周辺 B－5 d周辺	口　— 底　— 高　(9.5)	沈線を垂下して縦位区画し、単節 RL を縦位施文する。	色　暗黄褐色 焼　良	胴部の破片	加曽利E 3～E 4式
40	A－5 b A－6 a	口　— 底　— 高　(15.5)	3条の沈線を垂下して縦位区画し、単節 LR を縦位施文する。	色　にぶい黄橙色 焼　良	胴部の破片 外面剝落著しい	加曽利E 3～E 4式
41	B－6 a周辺	口　— 底　— 高　(15.8)	隆帯を垂下して縦位区画し、櫛歯状工具による条線を縦位施文する。	色　橙色 焼　良	胴部の破片	加曽利E 3～E 4式
42	F－5 b	口　— 底　5.5 高　(17.4)	単節 RL を縦位施文後、沈線を垂下して縦位区画する。	色　橙色 焼　良	胴中央部～底部	加曽利E 3～E 4式
43	A－6 c B－6 a周辺	口　— 底　— 高　(11.2)	櫛歯状工具による条線を縦位施文する。	色　橙色 焼　良	胴下部～底部の破片	加曽利E 3～E 4式

No.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
44	一括 B－6 a周辺	口　　－ 底　　－ 高　(15.8)	隆帯を垂下して縦位区画し、櫛歯状工具による条線を波状に垂下する。	色　にぶい黄橙色 焼　良	胴部の破片 No.45と同一個体	加曽利E 3 ～E 4式
45	B－6 a周辺 H－2号住一括	口　　－ 底　　－ 高　(9.3)	隆帯を垂下して縦位区画し、櫛歯状工具による条線を波状に垂下する。	色　にぶい黄橙色 焼　良	胴部の破片 No.44と同一個体	加曽利E 3 ～E 4式
46	O－4 c	口　　－ 底　11.6 高　(18.9)	単節 RL を縦位施文する。	色　明赤褐色 焼　良	胴中央部～底部の1/8	加曽利E 3 ～E 4式
47	B－6 a周辺	口　　－ 底　　－ 高　(9.6)	単節 RL を縦位施文後、両脇に凹線を伴う隆帯で曲線文を描く。	色　明黄褐色 焼　良	胴部の破片	加曽利E 4式
48	F－5 d	口　　－ 底　　－ 高　(7.5)	口縁直下に幅広の沈線を巡らし、沈線垂下後、無節 Lr を縦位施文する。	色　にぶい黄橙色 焼　良	口辺部の破片	加曽利E 4式

出土位置は重量の重い順に記載

第3表　土坑出土遺物観察表

D－6

No.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	D－6	口　　－ 底　　－ 高　(10.7)	半截竹管による集合化された平行沈線を、弧状に施す。	色　にぶい黄橙色 焼　良	胴部の破片	諸磯b式

D－7

No.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	D－7	口　　－ 底　　－ 高　(6.7)	幅狭の口縁部無文帯を有す。横位に巡らした2条の沈線と、斜位の隆帯脇に沿わせた2条の沈線とで、逆三角形の無文帯を構成する。	色　明黄褐色 焼　良	口縁部の破片	勝坂式
2	D－7	口　　－ 底　　－ 高　(9.8)	装飾把手。隆帯により区画し、隆帯沿いに爪形文を施す。区画内に鋭い三叉文を有す。	色　橙～灰褐色 焼　普通	把手部の破片	勝坂1式
3	D－7	口　　－ 底　　－ 高　(18.2)	単節 LR を縦位施文する。	色　橙色 焼　良	胴部の破片	加曽利E 3 ～E 4式
4	D－7	口　　－ 底　　－ 高　(6.0)	口縁部を肥厚させる。複節 RLR を縦位施文後、幅広の撫でを施す。	色　にぶい黄色 焼　良	口縁部の破片	加曽利E 4式

出土位置は重量の重い順に記載

第4表　ピット出土遺物観察表

P－1

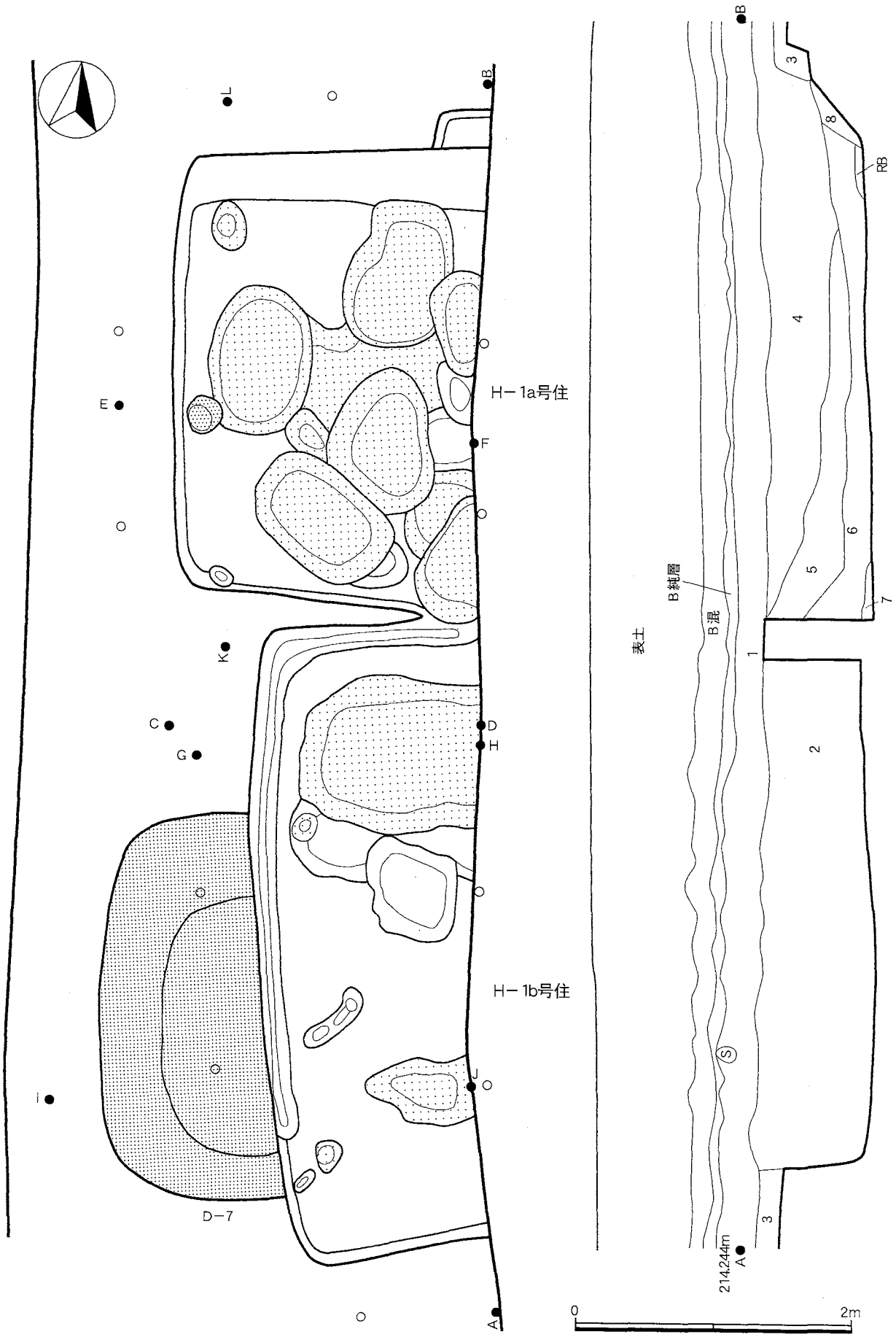
No.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	P－1 H－2号住一括	口　　－ 底　　－ 高　(8.6)	単節 RL を縦位・横位施文後、両脇に凹線を伴う隆帯で曲線文を描く。	色　表）黒褐色 　　裏）明黄褐色 焼　良	胴部の破片	加曽利E 3 ～E 4式

出土位置は重量の重い順に記載

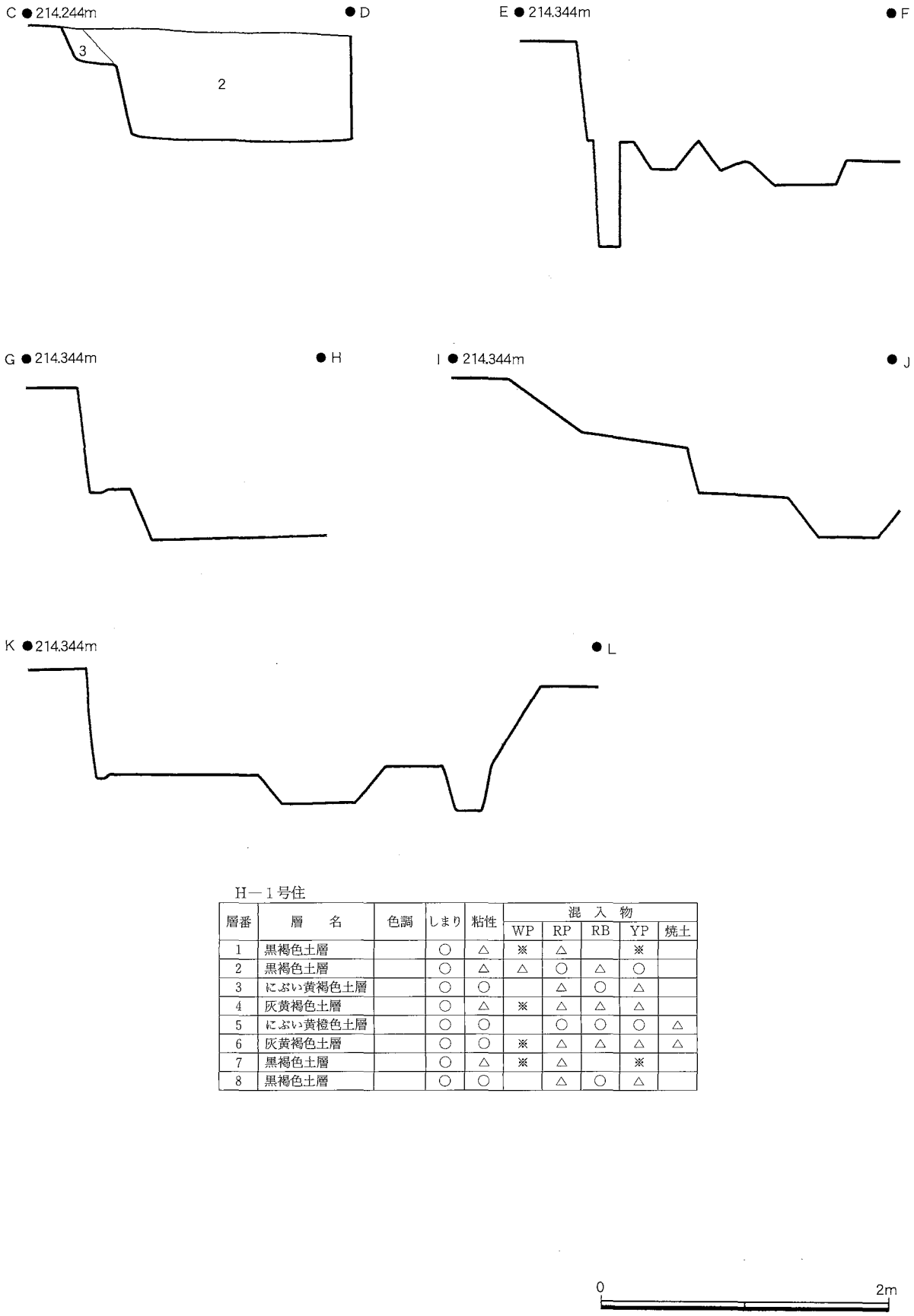
第5表　表採の遺物観察表

No.	出土位置	法　量	文　　様	色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	表採	口　　－ 底　　－ 高　(9.1)	口縁にボタン状貼付文と棒状貼付文を有す。半截竹管による集合化された平行沈線を、口縁部には菱形を意識したと推定される斜位に、口辺部には横位の矢羽根状に施す。	色　黄褐色 焼　良	口辺部の破片	諸磯b式
2	表採	口　　－ 底　　－ 高　(6.4)	半截竹管による集合化された平行沈線を横位に巡らす。	色　にぶい黄褐色 焼　良	胴部の破片	諸磯b式
3	表採	口　　－ 底　　－ 高　(4.5)	小突起を有す。口縁直下に粘土紐を波状に施す。単節 RL を横位施文する。	色　にぶい黄褐色 焼　良	口縁部の破片	前期後半

出土位置は重量の重い順に記載



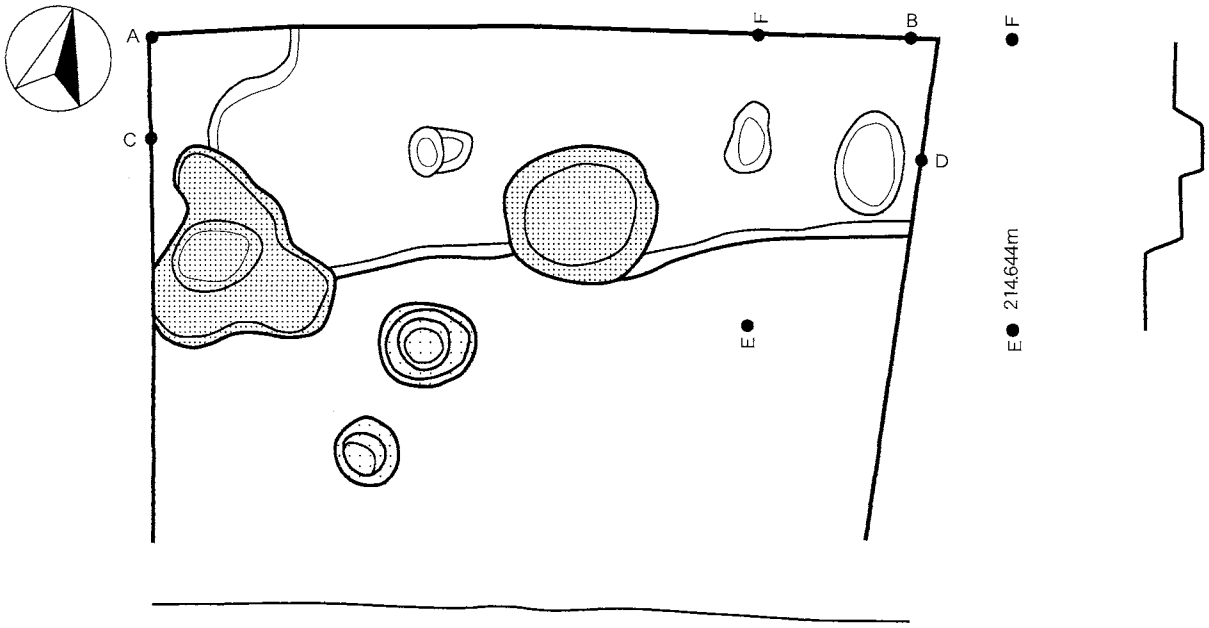
第13図　H－1a・b号住居址実測図(1)

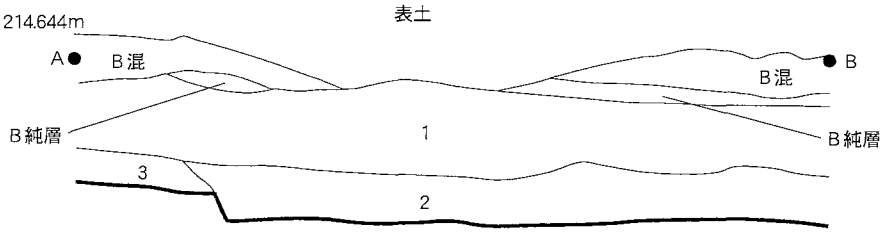


H－1号住

層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物				
					WP	RP	RB	YP	焼土
1	黒褐色土層		○	△	※	△		※	
2	黒褐色土層		○	△	△	○	△	○	
3	にぶい黄褐色土層		○	○		△	○	△	
4	灰黄褐色土層		○	△	※	△	△	△	
5	にぶい黄橙色土層		○	○		○	○	○	△
6	灰黄褐色土層		○	○	※	△	△	△	△
7	黒褐色土層		○	△	※	△		※	
8	黒褐色土層		○	○		△	○	△	

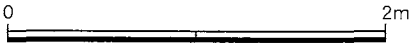
第14図　H－1ａ・ｂ号住居址実測図(2)



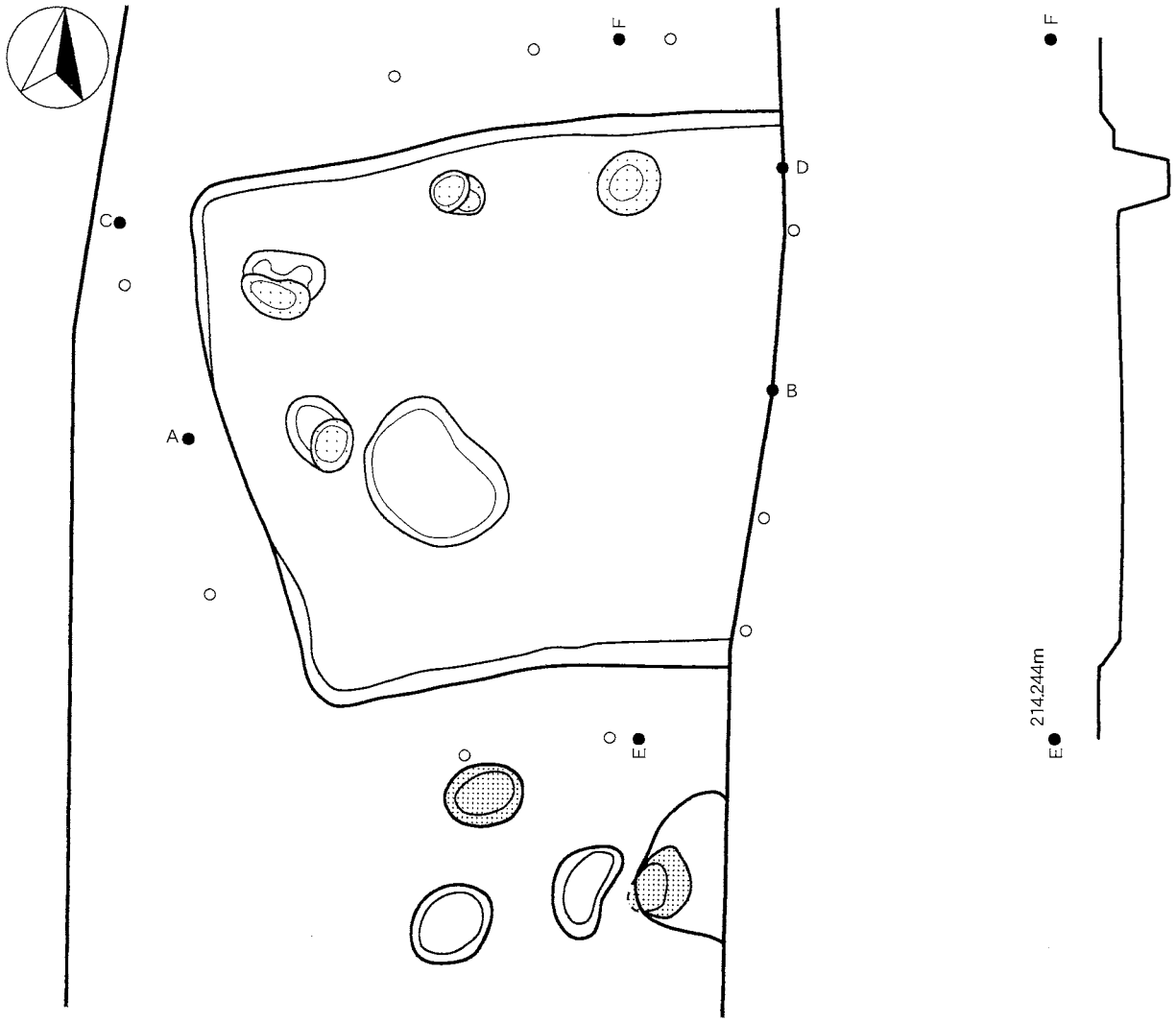


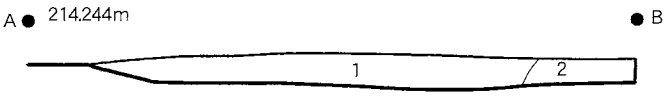
H－2号住

層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物			
					WP	RP	RB	YP
1	黒褐色土層		○	△	※	△		※
2	黒褐色土層		○	△	△	△	△	△
3	にぶい黄褐色土層		○	○		△	○	△



第15図　H－2号住居址実測図

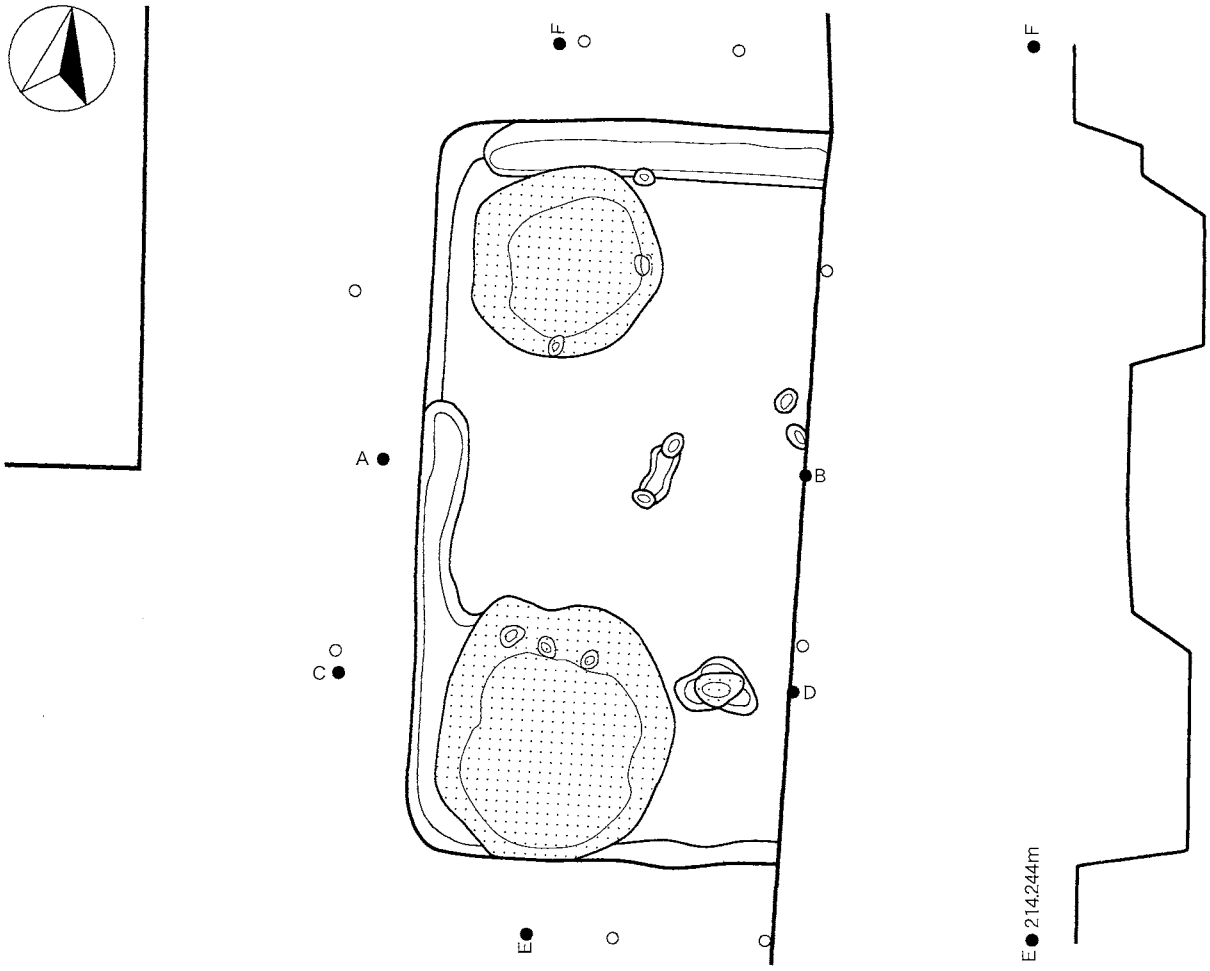




H－3号住

層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物			
					WP	RP	RB	ｽﾘｯｺ
1	黒褐色土層		△	△	※	※	※	※
2	黒褐色土層		△	△	※	※		

第16図　H－3号住居址実測図

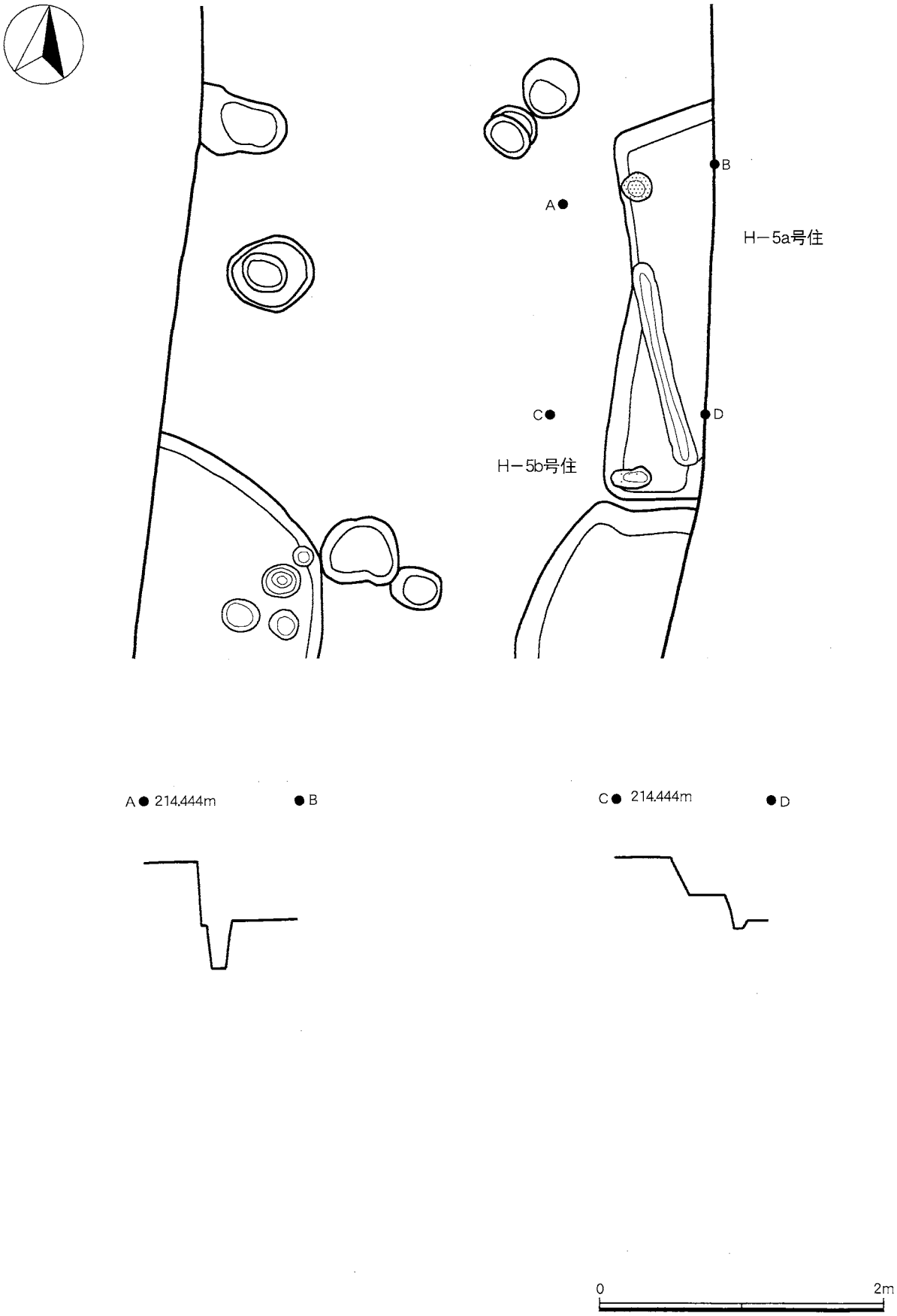


H－4号住

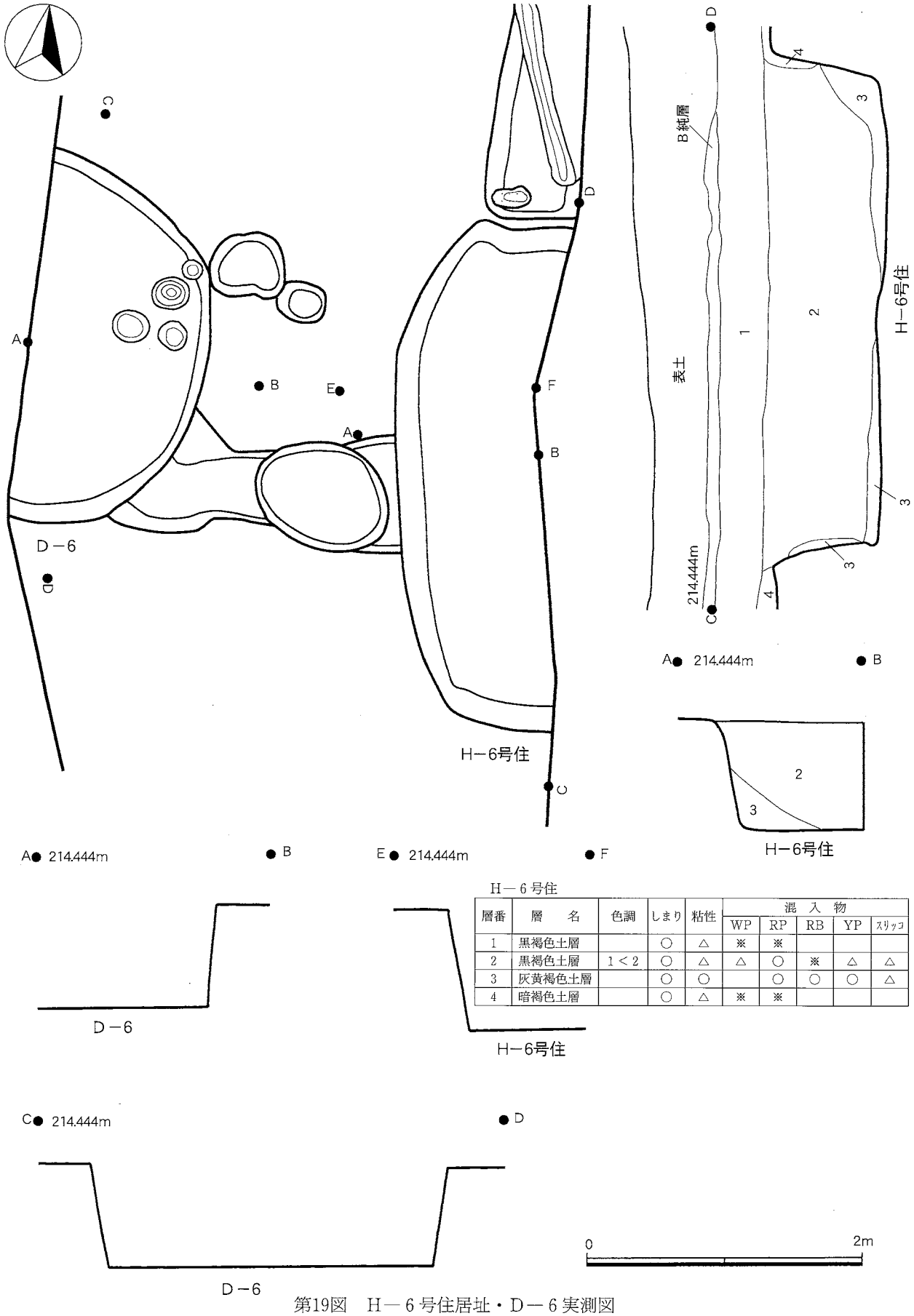
層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物			
					WP	RP	RB	ｽﾘｯｺ
1	黒褐色土層		△	△	※	△	△	△

0　2m

第17図　H－4号住居址実測図



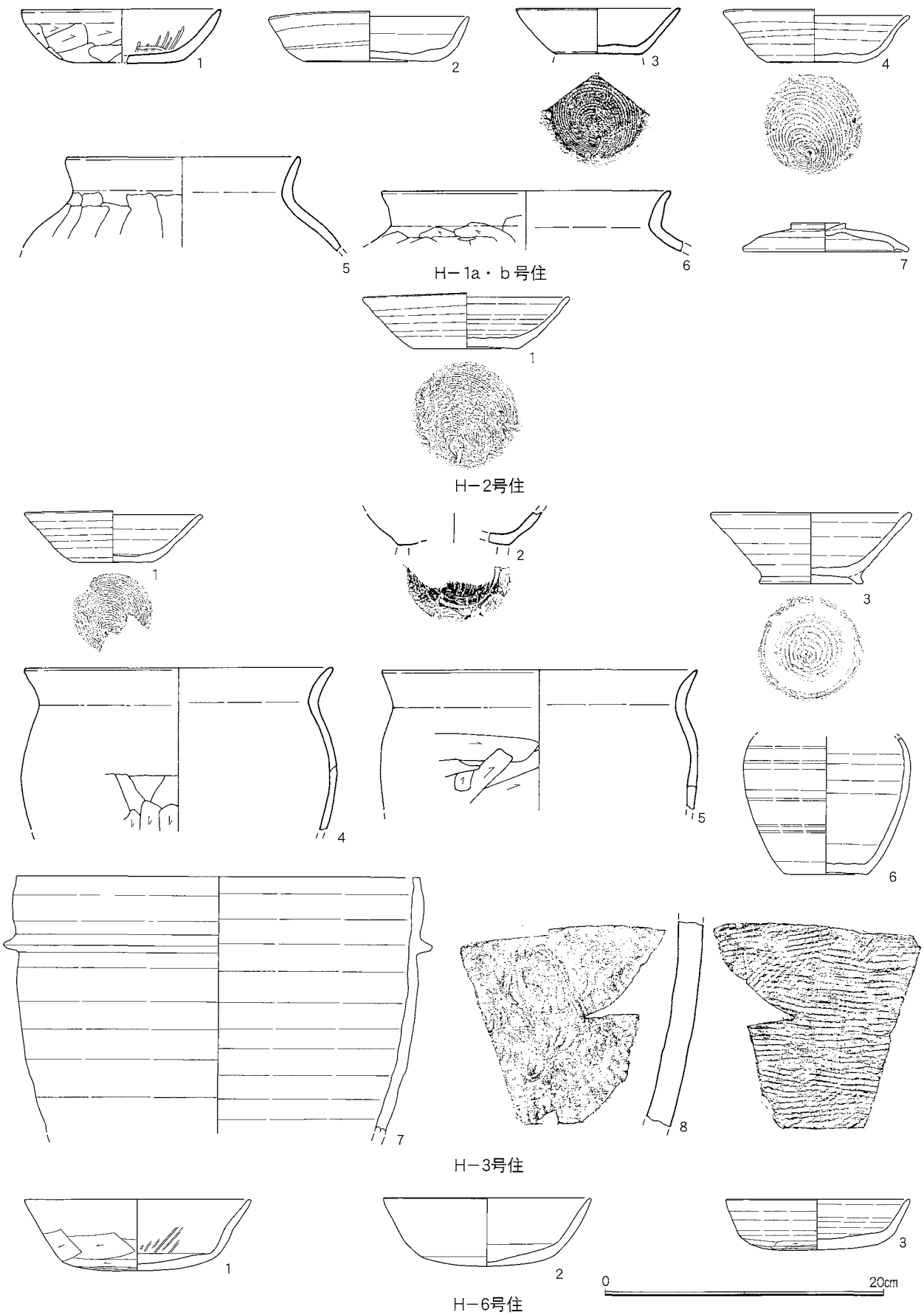
第18図　H－5a・b号住居址実測図



H－6号住

層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物				
					WP	RP	RB	YP	ｽﾘｯｺ
1	黒褐色土層		○	△	※	※			
2	黒褐色土層	1＜2	○	△	△	○	※	△	△
3	灰黄褐色土層		○	○		○	○	○	△
4	暗褐色土層		○	△	※	※			

第19図　H－6号住居址・D－6実測図



第20図　H－1a・b・2・3・6号住居址出土の遺物

第６表　H住出土遺物観察表

Ｈ－１号住

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	土師器 坏	10区１層	口　14.4 底　8.7 高　3.8	外面：口辺部横ナデ　体部斜方向ヘラケズリ　底部ヘラケズリ 内面：口辺部横ナデ　体部横ナデ後不定方向ヘラミガキ　底部ナデ	胎　砂粒を含む 色　橙色 焼　良	1/3	
2	須恵器 坏	10区１層	口　14.2 底　9.7 高　3.6	外面：回転横ナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　黄灰色 焼　還元	2/3	８世紀前半
3	須恵器 坏	３区２層 ３区１層	口　13.6 底　6.5 高　3.3	外面：回転横ナデ　底部回転糸切り 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　灰色 焼　良	口縁部の1/6～底部の3/4	
4	須恵器 坏	11区１層	口　13.2 底　7.0 高　3.8	外面：回転横ナデ　底部回転糸切り 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　灰色 焼　還元	7/8 内外面に火襷痕が顕著	９世紀前半
5	土師器 甕	６区３層	口　16.6 底　— 高　(6.8)	外面：口辺部横ナデ　胴上部縦方向ヘラケズリ 内面：口辺部横ナデ　胴上部横方向ヘラナデ	胎　砂粒を含む 色　にぶい褐色 焼　良	口縁部の1/2～胴上部の1/3	
6	土師器 甕	10区１層	口　21.0 底　— 高　(4.3)	外面：口辺部横ナデ　胴上部斜方向ヘラケズリ 内面：口辺部横ナデ　胴上部横方向ヘラナデ	胎　砂粒を含む 色　にぶい橙色 焼　良	口縁部の1/2～胴上部の1/3	
7	須恵器 蓋	11区３層	口　11.0 ツマミ3.8 高　2.0	外面：回転横ナデ　天井部回転ヘラケズリ 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　灰色 焼　還元	完形	８世紀前半

Ｈ－２号住

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	須恵器 坏	一括	口　14.5 底　7.4 高　4.0	外面：回転横ナデ　底部回転糸切り 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　灰～にぶい黄褐色 焼　酸化気味	口縁部の2/3～底部	９世紀前半

Ｈ－３号住

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	須恵器 坏	11区１層 14区１層 16区１層	口　12.5 底　5.7 高　3.7	外面：回転横ナデ　底部回転糸切り 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　にぶい黄橙～褐灰色 焼　酸化気味	1/2	９世紀後半
2	須恵器 高台付坏	Ｉ－５ｃ周辺 ７区１層 ５区１層	口　— 底　8.1 高　(2.3)	外面：回転横ナデ　底部回転糸切り後付高台 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　橙色 焼　良	胴下部～底部の1/4	
3	須恵器 椀	11区１層 Ｊ－５ｄ	口　14.0 底　7.3 高　5.1	外面：回転横ナデ　底部回転糸切り後付高台 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　にぶい黄橙色 焼　酸化気味	3/5	９世紀後半
4	土師器 甕	12区１層	口　23.0 底　— 高　(11.7)	外面：口縁部～胴上部横ナデ　胴中央部縦・斜方向ヘラケズリ 内面：口辺部横ナデ　胴上部～胴中央部横方向ヘラナデ	胎　砂粒を含む 色　橙色 焼　良	口縁部～胴中央部の1/6	
5	土師器 甕	11区１層	口　22.8 底　— 高　(10.0)	外面：口辺部横ナデ　胴上部不定方向ヘラケズリ 内面：口辺部横ナデ　胴上部横方向ヘラナデ	胎　砂粒を含む 色　橙色 焼　良	口縁部～胴上部の1/8	
6	須恵器 小型甕	15区１層 Ｊ－５ｄ	口　— 底　6.0 高　(9.9)	外面：回転横ナデ　底部回転糸切り 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　にぶい黄褐～黒褐色 焼　酸化気味	1/3	10世紀前半
7	須恵器 羽釜	13区１層 15区１層	口　28.9 底　— 高　(18.4)	外面：回転横ナデ 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　黄灰色 焼　還元	口縁部～胴下部の1/2	10世紀前半
8	須恵器 甕	11区１層	口　— 底　— 高　(14.7)	外面：平行叩キ 内面：同心円文	胎　砂粒を含む 色　灰色 焼　良	胴部の破片	

Ｈ－６号住

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考	時　期
1	土師器 坏	南３層	口　16.1 底　11.0 高　5.1	外面：口辺部横ナデ　体部横方向ヘラケズリ　底部ヘラケズリ 内面：口縁部～体部横ナデ後放射状ヘラミガキ　底部ナデ後螺旋状ヘラミガキ	胎　砂粒を含む 色　橙色 焼　普通	ほぼ完形 内面磨滅著しい	８世紀前半
2	土師器 坏	南３層	口　14.8 底　9.4 高　4.9	外面：口縁部～体部磨滅により調整不明　底部ヘラケズリ・単位不明瞭 内面：口縁部～底部磨滅により調整不明	胎　砂粒を含む 色　にぶい橙色 焼　普通	7/8 内外面磨滅著しい	８世紀前半
3	須恵器 坏	南３層	口　13.0 底　8.5 高　3.7	外面：回転横ナデ　底部手持ちヘラケズリ 内面：回転横ナデ	胎　砂粒を含む 色　灰～黄灰色 焼　還元	ほぼ完形	８世紀前半

出土位置は重量の重い順に記載

Ⅶ　おわりに

榎木畑Ⅱ遺跡は前述のとおり、榎木畑遺跡と同一の遺跡である。

榎木畑Ⅱ遺跡から縄文時代の住居跡は１軒確認されただけだが、榎木畑遺跡と合わせてみると中央広場を取り囲むように遺構が配置されていることがわかる。榎木畑Ⅱ遺跡の縄文時代前期から中期にかけての遺物が遺構に伴わず集中して出土した部分は、この中央広場の東端にあたり、遺物の廃棄行動などにも注意をして考える必要がありそうである。

８世紀から10世紀にかけての住居跡は、榎木畑遺跡と合わせてみると全体に広がってはいるものの、北側に集中する傾向が見られる。榎木畑Ⅱ遺跡の住居跡は、調査区の幅の狭い道路部分で検出され、遺構の１部分のみの調査となってしまったが、榎木畑遺跡のそれと同規模の住居跡と推測される。また遺物の出土が無く、時期不明とした２軒の住居跡に関しても、その形状や規模から、当該時期の住居跡と考えることが出来る。

今回の調査は、特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に伴うもので、この事業自体が苦しい予算の中でのものであり、埋蔵文化財の調査経費もかなり厳しい状況の中で行われた。当初は発掘調査のみで、遺物整理に予算が回らない状態であったが、特別養護老人ホーム明嶺荘の協力と、現地発掘調査の経営努力により、遺物整理の経費を多少なりとも捻出することが出来た。このような状況の中での調査のため、充分な整理期間も取れない中、とりあえず発掘調査概要報告と言う形で今回の概要報告書を作成した。分析の出来ていない資料や掲載できていない資料も多くあるため、それらは今後の報告の機会に譲ることとしたい。

発掘調査抄録

ふりがな	えのきばたにいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	榎木畑II遺跡発掘調査概要報告書
副書名	特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	千田茂雄　鬼形敦子
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0192　群馬県安中市安中一丁目23—13
発行年	西暦2006年３月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えのきばたにいせき 榎木畑II遺跡	あんなかしみね 安中市嶺 あざえのきばた 字榎木畑	102113	C—20	361858	1385109	20050601- 20050729	6,000㎡	社会福祉法人あんなか福祉会が実施する特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
榎木畑II遺跡	集落	縄文時代 ８世紀前半 ９世紀前半 ９世紀後半～10世紀前半 時期不明	住居址１軒 住居址２軒 住居址１軒 住居址１軒 住居址２軒	土器・石器 土師器・須恵器	縄文時代前期後半・中期前半～後半・８世紀前半から10世紀前半の集落址

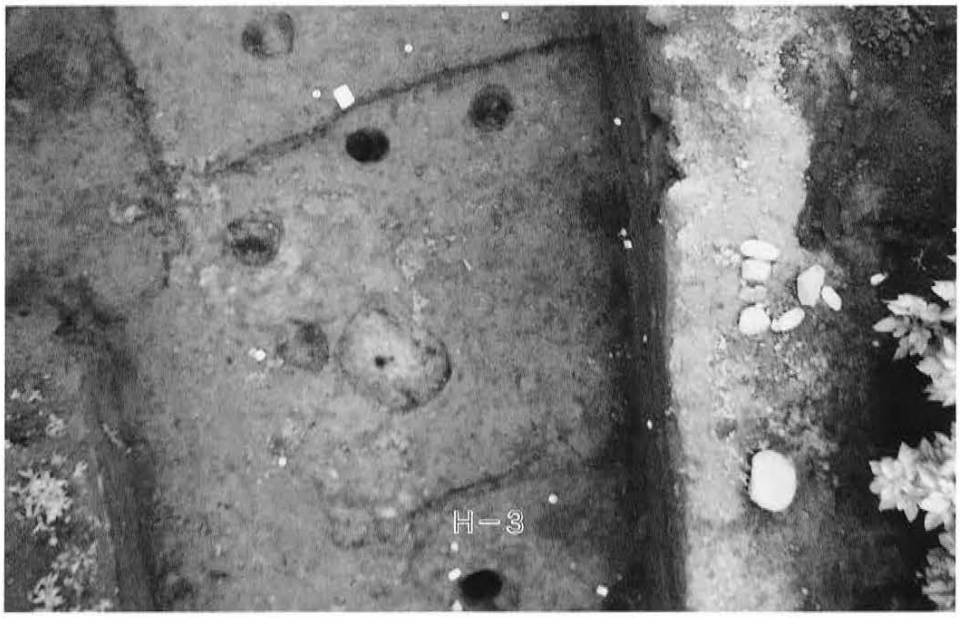
写　真　図　版

Ｊ－１号住・Ｈ－４号住全景

Ｈ－２号住全景

図版２

Ｈ－１ａ・ｂ号住・Ｄ－７全景

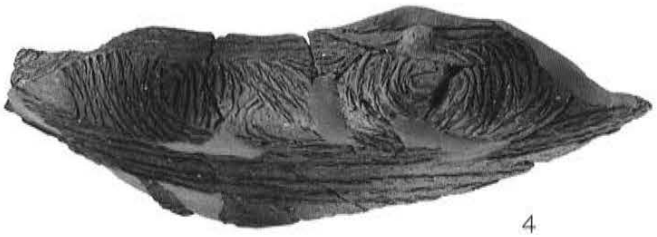


Ｈ－３号住全景

Ｈ－５ａ・ｂ号住・Ｈ－６号住・Ｄ－６全景

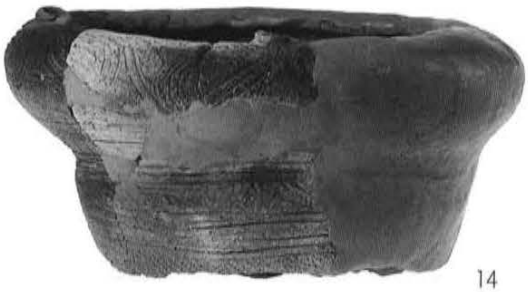
図版４

3



4

13

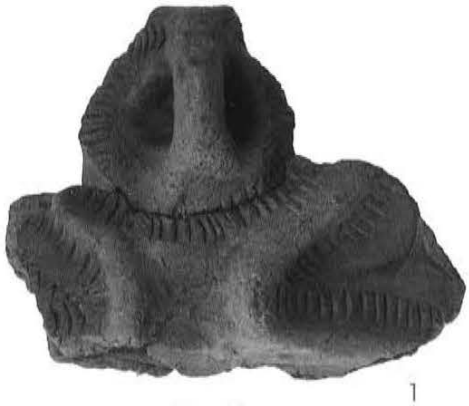


14

15

26

Ｊ－１号住居址出土の遺物



1

D－7

7

グリッド

17

グリッド

36

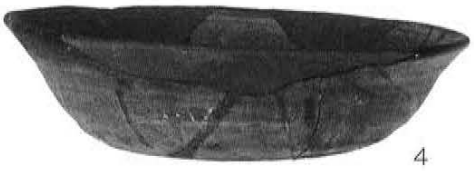
グリッド

37

グリッド

2

Ｈ－１号住



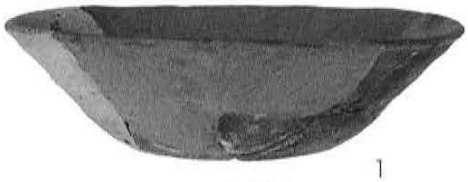
4

Ｈ－１号住

Ｈ－１号住　7

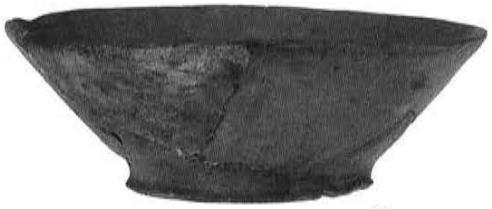
1

Ｈ－２号住



1

Ｈ－３号住



3

Ｈ－３号住

6

Ｈ－３号住

7

Ｈ－３号住

1

Ｈ－６号住

2

Ｈ－６号住

3

Ｈ－６号住

Ｈ号住居址出土の遺物

榎木畑II遺跡発掘調査概要報告書

——特別養護老人ホーム明嶺荘施設整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書——

発行日　平成18年3月17日

編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市安中一丁目23—13

印　　刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67